

J. = L. ゴダール 『勝手にしやがれ』——〈幸せな愛はない〉

南 直 樹

はじめに

世界に衝撃をもたらしたヌーヴェル・ヴァーグの代表作『勝手にしやがれ』は、ゴダール弱冠29歳の時の長編第一作である。映画の原題は「À bout de souffle」、つまり「息を切らして」であり、文字通り自動車泥棒のチンピラ、主人公ミシェル・ポワカール（ジャン・ポール・ベルモンド）の生き急ぐ青春の鮮烈さとその衝撃的な死を描いた作品であり、それを観る者の心に強烈な印象を残さずにはいない。また彼を魅惑し、彼の愛に応えたかのようにみえながら最後には彼を裏切るパトリシア・フランキーニ（ジーン・セバーグ）の瑞々しい美しさも忘れられない。淀川長治はこの映画を観て「『勝手にしやがれ』のゴダールが一九五九年にあらわれたときにはツバキを呑みこんだ」（注：『ユリイカ 十二月号臨時増刊 第21巻第16号 総特集 ヌーヴェル・ヴァーグ30年』青土社、p.62）と言ったが、中条省平は「映画史に深い亀裂を入れた革命的な作品。この一本から映画史には、ゴダール以前とゴダール以後ができた」（注：中条省平『中条省平の「決定版」フランス映画200選』清流出版、p.180）と評している。

この映画の靈感の元となったのは、1952年にフランスのタブロイド紙を賑わせた記事に基づくものだった。それをトリュフォーが4ページのシノプシスに書き上げた。それは「ミシェル・ボルターユという男が、アメリカ人のガールフレンドとコート・ダジュールで優雅な生活を送りながらある夏を過ごし、危篤の母親に会うために車でブルターニュまで行く途中、白バイ隊員を撃ち殺したのである。男は、ガールフレンドによって、警察に引き渡された」（注：コリン・マッケイブ『ゴダール伝』みすず書房、p.118）というものである。

ゴダールはあるインタビューの中で俳優への不信を表明して、「だから、俳優というのは不思議な存在だということです。それに私が思うに、連中は次第に幅の狭いものになってゆきます。おまけに連中には、連中が言い張っているのとは反対に、大したことはできません。台詞を書くことさえ出来ないのです。自分がしゃべる台詞は他人が書いたものでなければならぬのです！連中はごくわずかのことしかできません。おまけにそのやり方が下手なのです。今では偉大な俳優というのは一人もいません。いい俳優が何人かいるだけです。しかも、ごくわず

かなのです」（注：『ユリイカ 第15巻15号 ゴダール 未来の映画』青土社、p.96）と述べ、そうした惨憺たる状況の中で共同作業できる俳優はいないと言いながら、「例外を一人認めるとすれば、それはベルモンドです。それというのも、彼をつかう場合は、共同作業ができなくても苦にならないからです。彼はプロとして仕事をするのです。私が彼に、「君は部屋に入ってきて、「君を愛してるよ」と言って、壁をのぼって、天井を歩いて部屋を横切って、そして出てゆく、いいね」と言うと、彼はそれをします。それだけです。私に「なぜですか？」とか「どうやって？」とか「悲しそうな表情でやるのですか？」とかとは聞かないのです」（注：同前）と絶賛している。

ジーン・セバーグはそれまでオットー・フレミンジャーの二本の映画『聖女ジャンヌ・ダーク』とサガンの有名な小説の映画化『悲しみよこんにちは』に出演していたが、さほど高く評価されなかった。「それでも、この二作品は『カイエ・デュ・シネマ』のお気に入りの作品に数えられたし、『カイエ』の批評家たちはセバーグを『映画の新しい女神』であると断言した」（注：コリン・マッケイブ『ゴダール伝』みすず書房、p.119）。そしてこの『勝手にしやがれ』へのキャスティングによって、「映画を一フィートも撮らないうちに世界的なスターになったという、映画の全歴史を通じても稀有な例の一人」（注：同前）となった。「女性の美しさを描写するにあたって、ゴダールほどの才能を持っていた監督はほとんどおらず、セバーグも例外でなかった。強さと弱さの組み合わせ、自分のセクシュアリティを十分に自覚したアメリカ中西部の乙女でありながら、最も重要なこととして、必要とされる技能をほとんど欠いているのに〔ジャーナリズムという〕職業でどうしても成功を収めたい女性であるという矛盾、これらは『勝手にしやがれ』に永遠にとどめられている。精神錯乱と悲劇的な出来事の終りを告げた不幸続きの人生で、『勝手にしやがれ』は希望と喜びの瞬間だった」（注：同前）。

またこの映画を有名にした、画面の連続性を無視してショットを繋ぎ合わせるジャンプ・カットの技法について、ゴダールは次のように述べている。「映画は、二時間十五分以上ありました。（…）私たちはすべてのカットを細かく検討し、映画のリズムはくずすまいとしながら、切れるものはすべて切っていたのです。たとえば車のなかのベルモンドとセバーグのあるシーケンス

は、はじめ、まずベルモントがしゃべるカット、ついでセバーグがしゃべるカットといったように、切り返しの形でつないでありました。(…) そこで、その二人のそれぞれのカットを少しずつ縮めるよりもむしろ、一か八か、どちらかをばっさりとカットすることにしたのです」(注：同前、p.127)。

「映画作りに必要なのは、女と銃だけだ」(注：同前、p.105)とゴダールは言ったが、この映画ではそれに「自動車狂」の夢が加わる。ミシェルは自動車泥棒であって、次々と車を取り換えるからである。この映画の主題について、手持ちカメラで主人公たちとパリの街を縦横に撮り、映画撮影に革命をもたらした撮影監督のラウル・クタールは「ジャン＝リュックの映画には二つの主題しかない。死と、愛の不可能性だ」(注：同前、p.129)と言っている。この言葉は、この映画にこそ最も相応しい。『勝手にしやがれ』の日本上映時のポスターには、「盗みや殺ろしは平気だが 惚れた女にゃ手がでねえ!」という惹句が書かれていた。(注：『現代思想臨時増刊号 総特集 ゴダールの神話』 第二三巻第十一号、p.81)。

更に、この映画のタイトルが出る前最初に「B級映画会社のモノグラムに捧ぐ」という献辞が出るが、ゴダールはアメリカのB級映画からその作風を学んだと言われている。蓮見重彦は「おそらく、エドワード・G・ウルマーのPRC時代の撮影から最も多くの教訓を引き出し、いまなおおそらくそれに忠実なのはゴダールだろう」(注：蓮見重彦『ハリウッド映画史講義：翳りの歴史の中で』、筑摩書房、p.128)として、その経済的・時間的及び空間的に限られた条件の中での撮影の単純さの中にB級映画の輝きがあり、『勝手にしやがれ』の撮影に入ろうとすると、彼が手にしていたのは、フランソワ・トリュフォーの書いたほんの数枚のシノプシスだったからだ。彼の映画作りを特徴づけることになる即興演出、それもまたウルマーから学んだものだろう。被写体にカメラを向けていれば何かが起こり、それを編集すれば何かができるといった自堕落な即興ではなく、映画のように世界を生きている作家が編集作業でもあるようにして行う即興演出。こうしたことのできる人だけが「B級映画」を監督する資格をもっているのではなからうか」(注：同前、p.130)と述べている。

以下、映画の進行に沿ってこの素晴らしい見事なシナリオを訳し解説しながら、この映画の主題が「幸せな愛はない」であることを明らかにしてゆこう。(イタリック体は映画のシナリオのト書きである)。

マルセイユ——港——夏の昼

映画はマルセイユでミシェルが自動車泥棒を働く場面から始まる。スクリーンに「Paris-Flirt」紙の最後のページ面が映し出される。「flirt」は元は英語で「恋の戯れ

を意味する。この映画では最初ミシェルとパトリシアの関係は恋の戯れのように始まるが、愛を交わした後、映画の最後のところでミシェルが「惚れているんでね」とパトリシアへの愛が本物であることを示すのに対して、パトリシアは最後まで恋の戯れしか知らず、「戯れに恋はすまじ」(On ne badine pas avec l'amour)の格言を悟らない。それが密告という怯懦を産み、ミシェルの死という悲劇的な結末へと到るのである。その新聞の背後で「よく考えてみると…俺はアホだ。結局、いやそうだ、…そうであるべきだ。そうでなくちゃ」と呟くミシェルの声が聞こえる。「アホ」であること、それはミシェルにとって世間の慣習や掟は意味を持たないこと、そしてそうした事をまったく無視して生きるミシェルは、誰も彼を傷つけたり打ち倒したりすることは出来ない無敵の強さを持っていることを示している。新聞が下がり、背後に隠れている男を発く。それは25歳くらいの若い男だ。彼は褐色の髪あはの若い娘を見つめる。彼女は頭で大丈夫という合図を送る。「U.S. Army」と登録されたアメリカの大きな車が止まったところで、一組のカップルが鍵をかけずにドアをボタンと閉めてそこから出てくる。男はその連れの女を港の方へ連れてゆく。若い娘は再び合図をする。ミシェルは頭で「わかった」と言う。彼女は、そのボンネットを揚げた車の近くのミシェルの方へ顔を向ける。彼はそこにアリゲーター・グリップを握り付ける、するとエンジンが唸り始める。ミシェルはハンドルの前に座りドアをボタンと閉める。若い娘は車の方へ駆け寄り、次いで身を傾ける。彼女はミシェルの首の周りに腕を伸ばす。若い娘は「ミシェル…、私を連れてって」と言うが、ミシェルは「何時だ?」と聞き、娘が「11時10分前」と答えると、ミシェルは「だめだ…じゃな! 今や俺は突き進む…、アルフォンス」と言い残して走り去る。「アルフォンス (Alphonse)」は「突き進む (je fonce)」と音が合うので、しゃれで加えられたもので意味はない。冒頭の画面でミシェルが自動車の窃盗なりわいを生業なりわいとしていることが示される。

国道7号線——陽の射す昼

車はマルセイユからパリへと通ずるこの国道上をととても速く走っている。ミシェルは歌いながら次のように言葉を吐く。「ララララ…ラララ…ブエナス・ノチェ・ミ・アモール (おやすみ、愛しき女よ)… そんなボンコツのフレガート(注：自動車の名前)で俺を追い抜こうなんて大間違いだ。パ…パ…パ…パ…パ…パ…パ…パ…パトリシア! …パトリシア! … (彼は黒のフレガートを追い抜く)。それで俺は金を受け取るだろう…俺はパトリシアにイエスカノーを尋ねる…、それから… (彼は歌を唄う)。ブエナス・ノチェ、ミ・アモール…ミラノ! …ジェノヴァ! …ローマ! …田舎は綺麗だ! …」。この台詞からミシェルが、すぐ後で分かるように彼には危険がいっぱいのパリにあえて向かうのは、親友トルマチョフが預かっているはずの自分の金を受け

取るためであり、そしてニースで知り合いになったアメリカ人女子学生パトリアに会うためであることが判明する。彼は車のラジオ受信機を点ける。ラジオから「人の生は (Sa vie) ...」とジョルジュ・ブラッサンス (注: Georges BRASSENS (1921-1981). Sèteに生まれ、1939年、リセを中退してパリに飛び出し、働きながら作詞、作曲する。52年に歌手としてデビュー、57年にはRené CLAIRの「Porte de Lilas」『リラの門』に出演。67年、アカデミー・フランセーズの詩の部門のグランプリを受賞)の『幸せな愛はない (Il n'y a pas d'amour heureux)』の初めの歌詞が一瞬流れる。ここで既にこの映画の主題が暗示されているのである。ミシェルが続けて「俺はフランスが大好きだ。もしあなたが海が好きでないなら...、山が好きでないなら...、町が好きでないなら...とっとと消え失せろ！」と吐いていると、ヒッチ・ハイクする二人の女性を見かける。「お！...お！...ヒッチ・ハイクする女の子たちだ。いいだろう！...俺はストップして1キロごとにキスをする送り状を作成する」。車はその走行を緩める。ミシェルは「小柄な方は悪くない。綺麗な大腿ふとももをしている。そう、しかしもう一人は！」と言って加速して彼女らを追い越し、「お！結局...ちえっ！彼女らはあまりにブスだ...」と言う。加速して彼女らを見捨てて走り去る。彼はラジオを点ける。すると又ラジオからジョルジュ・ブラッサンスの「愛はない... (Il n'y a pas d'amour...)」と『幸せな愛はない』の歌詞が一瞬流れる。こうしてこの映画の「幸せな愛はない」の主題が再提示される。ミシェルは (ラジオの) 受信機を消し次いでグローブコンパーメントの方へ手を伸ばし、そこから一丁の拳銃を取り出す。彼は「エ！...エ、エ、エ！...」と叫びながら、武器をバックミラーの方や、フロント・ガラスの方へ向け、狙いを定め引き金を引く自分を想像しながら「パン...パン...パン...パ！太陽が綺麗だ...」と叫ぶ。黒い画面に無音の三発の発射。それは事実道を縁どる木々の葉陰を通して浸透する太陽である。道が登っているので一台の2CVシトロエン (注: 当時のフランスの最も有名な大衆車) がゆっくり進んでいる。ミシェルは「ハンドルを持った女性というものは、臆病そのものだ...何故彼女は追い越さないのか? ...あー！...そう、ちえっ...面倒だ！」と吐きすてる。車たちはスローモーションで進んでいる。「危険、速度30キロ」という標識を前にしてそして相変わらず2CVの後ろで、ミシェルは苛立つ。彼は言う「あー！...決してブレーキをかけるべきではない。そしてブガティ爺さん (注: Ettore BUGATTI (1881-1947) ミラノ生まれのイタリア人で後にフランスに帰化。1898年から自動車の製造を始めた) が言っていたように、車というものは走るために作られているのであって、止まるためじゃない」。ミシエルの車は、坂道にもかかわらず、黄色の車線はずれるにもかかわらず最後には追い越してしまう。ミシェルは加速する。しかしそれを白バイの警官に見咎めがれ、「ちえっ...ポリ公だ！」と言う。車は加速しオートバイ隊員の前を通過する。彼らはミシェルを追跡する。茂みに隠された道があり、車はそこに入りブレーキをかける。

「おー！...アリゲーターが飛んだ (注: クリップと電池をつないでおいたコードがはずれたの意。アリゲーター (鱷) と呼ぶのはクリップの形が鱷の口に似ているからであろう)」。彼は車から出る。最初のオートバイ隊員は止まることなく通過する。ミシェルは怒って「なんてドジなんだ！」と言っていると、2番目のオートバイ隊員が車の方の道に入ってきて、ブレーキをかける。ミシェルは急いで車のドアの方に戻り、拳銃を手取る。オートバイ隊員が「動くな、さもないと殺す」と叫ぶ。銃声。オートバイ隊員の体が茂みの中に転がる。ミシェルは畑を横切って走り、小さな通りを渡り遠くへ逃げ続ける。こうしてミシェルは盗んだ車の中に拳銃があった偶然から、衝動的に殺人を犯してしまうのである。この拳銃を手取るという偶然が映画の終わりでも起こる。しかも悲劇的な結末として。

パリ——夜明け

パリへとやって来たミシェルは車から出て、電話ボックスに入る。彼は公衆電話にコインを入れる、しかし躊躇ためらう。少し経って、彼は掛け直し、コインの落下を速めるために公衆電話を乱暴に叩くそして外に出る。彼は新聞を買ってきたところだ、そしてそれを読む。彼は「家具付き」と言うホテルの敷居の上にいる。ガードマンの方へ振り向く。ミシェルは「マドモワゼル・フランキーニは何号室だ？」と尋ねる。ガードマンは「彼女はいない」と答える。ミシェルが「ここに確かに住んでいる」と言うと、ガードマンは「「もうここにはいない」とは言っていない」と言い返す。

家具付きのホテル——室内

ミシェルはホールの中に入り、ガードマンが背中を向けたかどうか自分の後ろを見るそして鉤掛け箱の方へ急ぎ駆け寄る。彼は階段の方へ走る。

パトリアの部屋

ミシェルは浴室から出てくる。彼は少し至る所を探る。「決して金を持たない、女の子は！...」と不満を述べる。

カフェ——昼

ミシェルはカフェに入り注文する。「生ビール一杯！」。ミシェルはポケットに手を突っ込み引き出す。50サンチームの硬貨2枚と1フランの一枚の硬貨。ミシェルは文無しなのである。ミシェルが「ハムエッグは幾らだ？」と尋ねると、女性の声が「180」と答える。ミシェルは「そう...、じゃそれを一つ」と言い、女性が「はい」と応ずる。ギャルソンがかれに生ビールを供しそれを彼はすぐに飲む。ドアの方へ向かいながら、彼は振り向いて言う。「新聞を買ってくる。すぐ戻る」。ミシェルは通りを走って横切る。彼は文無しなので

食い(飲み)逃げしているのである。

ビルの中庭

ミシェルは古いビルのなかに現れる。彼は新聞を読み、次いでそれを投げ捨ててそして階段を駆け上がる。勿論、警官殺害の記事が出ていないか見ているのである。

女中部屋

廊下から、ドアが若い娘の顔の上に細目に開く。彼女はミシエルの知り合いらしいが彼を見て「おや! まあ! ミシェル!」と言い、ミシェルが「入ってもいいかい?」と尋ねると、娘は少し躊躇った後「いいわ」と答える。ミシェルは中に入り「元気、ねえ君?」と挨拶をする。若い娘が「あなた上着持ってないの?」と尋ねると、「うん。それを俺のスーパー-スプリントのアルファ-ロメオの中に置いてきた」と答える。娘はベッドの上に身を置きシーツの下を探る。ミシェルが「ロワイヤル(注: 昔のRoyal Saint-Germainでサン-ジェルマン-デ-プレにあった有名なカフェ)に朝食を摂りにいかないか?」と誘うが、娘は毛布の下から「だめ。私遅刻しているの」と拒否する。ミシェルはその機会を利用して押し入れから財布を引き出す。彼は紙幣を数え、それを財布の中に元に戻す。娘は「9時10分にテレビ局に行かないければならぬの」と言う。娘は最後にミニトランジスター-ラジオを揺すりながら現れそれを耳に持ってくる。彼女のバジヤマの上着が裂ける。彼女は「ひどく裂けてしまった!」と言いながら、(ラジオ受信機を動かす。ブルースが聞こえる。)そして「(チャンネルが)見つかった...この頃何しているの? ...このところ顔を見せなかったわね」と言う。ラジオが「7時2分です」と告げ、ミシェルは「俺かい、何も...旅をしている」と答える。ラジオから(別の声で)「ラジオ-ルクサンブルです...」と流れ、ミシェルが「それでカルチエ-ラタンには、何か新しいことがあったかい?」と尋ねると、娘は「知らないわ」と答え、前者が「君はもうそこには行ってないのかい?」と言うと、後者は「時々、時々ディスコに、でも馬鹿な男たちしかいない」と返す。(彼女はブラッシュ(注: ピロードより光沢のある生地)の小さな猿に触れそれをもて弄び)「スイス製の」と言う。ミシェルが「相変わらず映画をやっているのかい?」と聞くと、娘は「おー! いいえ。あまりの多くの男と寝なくちゃならない。アンリコを覚えている?」と答える。ミシェルは「Tu te le rappelles! ... (彼を思い出す!) あるいは ou tu t'en souviens! ... (想い出す) だ! しかし tu t'en rappelles はダメだ」と教える。娘は「テレビで彼と一緒に働いているの。私はスク립トガール(注: 記録係り)なの」と現状を告げる。(体を真つすぐにして) 娘のフランス語の間違いを訂正してミシェルが「ローマで、12月、俺はすかんばんだった。映画

のアシスタントだった...チネシッタで! (注: ローマ近郊の映画撮影所)」と言うと、娘が「あなたが?」と問い、ミシェルは「そう、俺が」と答える。「もしかして、つばめだったことは一度もないの?」と尋ねる娘に、ミシェルは「何故だい?」と聞くと、彼女は「ただなんとなく!」と言う。電話のベルが鳴る。娘は受話器を外す。ミシェルは「俺...なりたいたいと思っているのだが、...そう!」と答える。娘は電話で「ええ、後でかけ直して」と言う。ミシェルが「それでギャビィ...彼はスペインから戻ったのかい?」と尋ねると、娘は「彼はラ・ベルゴラ(注: Mabilionにあるカフェの名。つる棚、日蔭棚の意味がある)を買ったの」と言うのに、ミシェルは「あーそうなんだ? ...すごいな! 全部を黒く塗ったのはバカだ」と返すが、娘は「いいえ」と否定する。部屋の壁には、煙草の箱で構成された、「何故(Pourquoi)」という単語が書かれている。(OとIの文字が欠けている)。「なんて書かれているんだい?」とミシェルが尋ねると、「pourquoi(何故)。でも決して書き終わらないの...今はラッキーを吸っているから」と娘は答える。ミシェルが「昼まで5000フラン(注: この映画の時代は旧フランであった)貸してもらえないかな?」と金の無心をすると、娘は「そう来るとは思ったわ。あなた最低ね、ミシェル」と断る。ここでこの映画の最後で瀕死のミシエルの口からパトリシアに向けて発せられるキーワード「最低(déguéulasse)」が既に現れている。「違う...昼には返すよ」と再度無心するが、娘は「それに、私はそれを持ってないし。(彼女は自分の財布を取り出しそしてそと一枚のお札を取り出す)よければ、500フラン持っているわ」と言って差し出す。ミシェルは「いいよ、持っておけ」と言うしかない。彼女は札を整え、次いで財布のふさわしい場所に戻す。手にワンピースを持ち、彼女は鏡台の方に駆け寄る。彼はそれを利用して財布から数枚の札を「抜き取る」。彼はそれの一枚を落とすがすばやく拾う。ミシェルが「それじゃ君はロワイヤルで朝食を摂りに来ないんだね?」と言うと、娘は「そう、とても遅刻しているの」と言うので、ミシェルは「いいよ! ...アルデベルチ! (注: イタリア語のAu revoir)」と言い、彼女は「チャオ、ミシェル!」と答えてこの場面が終わる。ミシエルのやくざなせこい性格が見事に描き出されている。

インター-アメリカーナの旅行代理店——室内 昼

ミシェルはタイプを打っている秘書に話かける。「トルマチョフさんはいますか?」。秘書は「ええ、います...けどいいわ」と答える。

シャンゼリゼ大通り——昼

ここでやっとミシェルはパトリシアに出会う場面となる。ミシェルはブルネットの若い娘を立ちどませる。少女は振り

向く。ミシェルが「パトリシアは君と一緒にかい?」と問うと、娘は「彼女は向うにいるわ」と英語で答える。ミシェルは「ありがとう」と言う。ブルージーンズをはいた(男の子のように、とても髪短い)ブロンドの若い娘が、叫び声をあげて自分の新聞を売ろうと試みながら往来している。彼女はシャンゼリゼを下っている。「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン! ...ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン!」というパトリシアの声。そこへミシェルが「俺と一緒にローマに行かないか?」と話しかける。ミシェルにとって自分の金を受け取ってパトリシアと共にローマに逃避することが一番の願いで、救いであることが最初に示されている。彼女は振り向き、彼に微笑みかける。ミシェルは「そう、恐らく馬鹿げている、でも俺は君が好きなんだ。君に再び会うことが俺を喜ばせるかどうかを知りたくて君にもう一度会いたいと思った」と自分の心情を告白する。「何処から来たの? モンテカルロ?」とパトリシアが問う。ミシェルが「否、マルセイユから。土曜日と日曜日はモンテカルロに留まっていた。ある男と会わなければならなかった。月曜日に、マルセイユから君に電話しようと試みた」と答えると、パトリシアは「月曜日と日曜日は、私はパリにいなかった」と言う。彼女は時々向きを変えそして叫ぶ。「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン!」。ミシェルは(ポケットの中を探って)「一部もらおう」と言うと、パトリシアは(彼に新聞を差し出しそして硬貨を受け取って)「ご親切さま! ここで何をしているの...あなたはパリは大嫌いなものだから?」と問う。ミシェルが「大嫌いだとは言っていない、沢山の敵がいると言った」と答えるので、パトリシアは「それじゃあなたは危険なのね」と言うと、ミシェルは「そう、危険なんだ。パトリシア、俺と一緒にローマへ行かないかい?」と再び自分の願望を告げる。しかしパトリシアは「それであそこで何をやるの?」と言うので、ミシェルは(肩をすくめて)「行けばわかるよ!」と答える。パトリシアは「だめ! ...私はパリですることが沢山あるの、ミシェル」と拒否するので、ミシェルは「今や、君は何をしてるんだい? ...シャンを登ったり下ったりしているのかい?」と問うと、パトリシアは「シャンって何のこと?」と問い返す。ミシェルが「シャン-ゼリゼのこと...俺はジョルジュ-V大通りに行かなくちゃならない」と言うので、パトリシアは「いいわ、じゃここで別れましょう」と答える。ミシェルが「さあ...一緒に逆登ろう」と言うと、パトリシアは「それじゃ、通りまで」と返す。ここはシャン-ゼリゼ通りが凱旋門からコンコルド広場まで下りの坂道になっていること知っておく必要がある台詞である。彼女は自分の新聞を売ろうと試みる。「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン! ...」。ミシェルは新聞をパトリシアに返す。「これ君に返すよ。星占いが無い」とミシェルが言うのに対して、パトリシアはその単語を知らず「l'horoscopeって何のこと?」と尋ねるので、「星占いは、未来のことだ。俺は未来を知りたい。君はそうじゃ

ないのかい?」とミシェルは答える。パトリシアは「私も同じ...ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」と叫ぶ。人間にとって自分の未来を知ることが決して叶わぬ願望であろう。ミシェルは彼女から眼を離さない。彼女はそれをやると理解する。「どうしたの?」とパトリシアが尋ねると、ミシェルは「なにも。君を見ている」とだけ答える。パトリシアが「私があなたにさよならを言わずに出発したことを怒っているの?」と言うと、ミシェルは「いいや...しかし俺は怒り狂っていたなぜなら悲しかったから」と自分の気持ちを吐露する。一人の男が一冊の雑誌(「ポリオ反対」「アルコール中毒反対」様式)を振り回しながら彼らに近づいてくる。ミシェルは拒否のサインを出す。ミシェルは「女の子の隣で眠るのではなく、眼を覚ますのは快い」とパトリシアへの想いを言い続ける。パトリシアが「あなたはパリに留まるの?」と聞くので、ミシェルは「そうだ。俺に金の借りのある男と会わなければならない... (彼はその腕をパトリシアの首の周りに回す)。その後、君に会わなければならない」と答えると、パトリシアは(丁寧に身を振りほどきながら)「いいえ、その必要はないわ」と拒む返事をする。ミシェルが「何故だい?」と聞くと、パトリシアは「パリには私より綺麗な娘が沢山いるわ」と言い逃れしようとする。ミシェルは「いいや! ...奇妙なんだ! ...俺たちが会ってから、俺は二人の女の子と寝た。それで...まったくうまくいかなかった」と言うと、パトリシアには解らない単語が使われたので「Gazait! ...何のこと?」と問うので、ミシェルは「彼女たちはとても綺麗だった、しかしうまくいかなかった...うまく運ばなかった...惨めだった! ...君はローマに行きたくないかい? 俺は、フランスにはあきあきしている」と、自分の金を受け取って彼女と一緒にローマに行くことが彼の本望であることを告げる。しかしパトリシアが「でも私はできないわ。ソルボンヌに登録しなければならない。さもないと、両親がもう私にお金を送ってくれなくなるわ」と言い訳しようとするので、ミシェルは「俺が君にそれをやるよ」と答える。パトリシアが「でも私たちは三夜を一緒に過ごしたただけだわ」と言うと、ミシェルが「違う、五夜だ! ...何故君はブラジャーを決して着けないんだい?」と問い返すと、パトリシアは「聴いて! ...そんな風に話さないで!」と強く反発する。ミシェルは「分かった、謝るよ... (彼は腕時計を見るためにパトリシアの手首をとる) 何時だ? ...すぐ後で会おう?」と誘うと、パトリシアは「いいえ...、すぐ後はだめ。今晚なら...、いい?」と答え、ミシェルが「イエス...、どこで?」と言うとパトリシアは「お! ...ここで...」と言う。彼女はミシエルの頬にキスをし、逃げ去る。彼は反対側に出発する。映画のポスターの一部がインサートされる。そこには「最後まで危険に生きる ハマー映画プロダクションはジェフ チャンドラーを上演する」(注: R. ALDRICH監督の1958年の映画。英語の題名は「Ten Seconds to Hell」『地獄へ10秒』)と書かれている。この映画の表題はこれからの

ミシエルの行動と運命を暗示しているかのようである。ミシエルは掲示板の前、^{サンク}ジョルジュV大通りの歩道の上を歩いている。一人の娘が彼のところにやって来て「カイエ・デュ・シネマ」を振りかざす。娘は「ムッシウ...すみません!...あなたは若者たちに反対なことは何もありますか?」と問うので、ミシエルは「あるよ!...俺は老人が結構好きだ」と答える。「カイエ・デュ・シネマ」は勿論ヌーヴェル・ヴァーグの監督たちが扱った映画雑誌であり、それを拒絶するミシエルの態度はゴダール一流の諧謔の表れであろう。娘は顎め面をする。鋭いブレーキの音。ルノー4CVがスクーターの男を避けようとしてブレーキをかけた。ミシエルは事故の方向へ振り向く。4CVの運転手が車道に横たわっている男の方へ駆け寄る。ミシエルは横たわっている男を一瞥する。彼は向き直りとても曖昧な十字の印を切って再び出発する。この簡単な事故死はミシエルの最後の死の安易さを暗示しているのだろう。新聞のインサート。『捜査記録：警察は国道7号線の殺人犯をすでに特定した。A.F.P. 8月19日。マルセイユで一昨日盗まれたオールドモデルのハンドルに残された指紋のお蔭で、ヴィタル警部は、国際刑事警察機構経由で、国道7号線で卑劣にも暗殺されたチボーオートバイ隊員の殺人者の身元を彼に提供するローマからの電報を受け取るまで2時間しか待つ必要がなかった』。

インター-アメリカナ旅行代理店——昼 室内

ミシエルは秘書の方へ身を傾ける。「トルマチョフさんはいますか?」とミシエルが尋ねると、秘書は「航空機の窓口に...」と答える。ミシエルは書類綴りを見ている男の近くにやって来る。トルマチョフが「やあ、友よ!」^{アミーゴ}と言ひ、ミシエルが「やあ、息子よ!」と応ずる。トルマチョフが「10時に寄ったのは君か?」と尋ねると、ミシエルは「俺の金を受け取りに来た...、そうなんだ」と答える。トルマチョフが「それはある...来い。元気か?」と言ひ、ミシエルは「コート・ダジュールにひどくうんざりした。俺はある娘に会いに来た。それでお前は?」と答えると、トルマチョフは「俺かい、ここで身を捨てようとしている。錆びついている最中だ」と言ひ、ミシエルは「殴られるより錆びる方がいい!...」と「rouiller (錆びる)」と「dérouiller (殴られる)」のシャレで返す。彼らは大きな部屋、カウンターの背後に現金出納係と会計係のいるその中へ入る。トルマチョフは彼らの一人に近づく。トルマチョフは「ここだ!... (ある会計係に) あなたに預けた封筒があるかね?」と言ひ。現金出納係はそれを彼に差し出す。トルマチョフはミシエルの方へ向き直る。後者はそれを取りそして手紙の封を切り、そこから小切手を取り出す、そして叫ぶ。「ばかな野郎だ!...なぜ奴は小切手に横線を引いたんだ! (注:「銀行渡しにする」の意)」。トルマチョフは「俺は知らない。小切手を裏書しろ...俺の名前にするな、俺は日曜の三枚をほどこした。俺はもう何も持たない、そうだろ!」と言ひ、ミシエルは「それで君の友人ボブ・モンター

ネ、彼なら、俺にそれを割引してくれるだろうか?」と問うが、トルマチョフが「監獄に入っている、あのばか野郎は!」と答える。ミシエルは「ほんとか!...またベルッチもいる...、しかしあまり信用は置けない」と言ひ、トルマチョフが「それは君の友人だと思っていた」と返し、ミシエルは「彼はチュニスから戻ったのか?」と問うと、トルマチョフは「うん、昨日彼を見た...」と答える。ミシエルは「彼の電話番号は何だっけ?」と尋ねると、トルマチョフが「エリゼ99-84だ」と教える。ミシエルは(カウンターの電話機を指し示して)「ここから掛けてもいいか?」と言ひ、トルマチョフは「ああ、いいよ」と応じる。ミシエルは番号を回す。トルマチョフが「君が会いにやって来た若い女の子は誰だい?」と問うので、ミシエルは「ニューヨーク娘だ」と答える。トルマチョフが「綺麗なのか?」と言ひ、ミシエルは「彼女は変っている。俺は彼女を結構好きだ」と答える。この段階では、ミシエルのパトリアへの気持ちはまだとても気に入っているいる段階で、それほど深い愛情的なものではないことが知れる。「(電話口で) もしもし、...エリゼ99-84ですか? アンтониオと話することができますか? (間) ああそう! 否、否、かけ直します。(彼は受話器を置く)。彼はいない。他を当たってみるよ...さよなら、息子よ!」と言ひ、トルマチョフも「チャオ、友よ!」と言ひ別れる。ミシエルは外に出るそして入ってくる二人の男とすれ違う。最初の男が秘書の方へ身を傾ける。彼はとても控えめに彼の警察手帳を見せる。ヴィタル警部が「インター-アメリカナ?」と尋ねると、秘書が「はい、ここです」と答え、ヴィタルが「お宅はここに彼らの郵便物を届けてもらう客がいるかね?」と問うと、秘書は「はい」と言ひ。ヴィタルが「ミシエル・ポワカールとかいう男を知っているかね?」と尋ねると、秘書は「いいえ」と答えるので、ヴィタルは「彼はまたラスロ・コヴァックという名前を使っている」と言ひ、秘書は「あちらの方に尋ねてください。彼がそれを担当しています」と言ひ、ヴィタルは「そう」と言ひ、突然、ヴィタルの顔が明るくなる。トルマチョフが飛行機の模型の傍にいる。ヴィタルは彼の肩を叩く。「おや、おや...トルマチョフ!」と声をかけると、トルマチョフは「こんにちわ。刑事さん」と答え、ヴィタルが「君は今団体旅行の企画を立てているのか?」と問うと、トルマチョフは「ご覧のとおり!」と答える。ヴィタルが「覚えているか、君が友人のボブを売ったことを?」と言ひ、トルマチョフは「だからどうだって言うんです」と言ひ返すが、ヴィタルは「いいかい...君は同じことをするんだ... 1メートル79の、栗色の髪の毛の、エール・フランスの元スチュワード、ミシエル・ポワカールがインター-アメリカナ代理店にその郵便物を送ってもらっている」とまた密告をするよう仄めかす。トルマチョフは「ええ、彼を知ってる」とだけ答えると、ヴィタルは「彼は最近ここに来たか?」

と問うので、トルマチョフは「いいえ」と言う。警察の手がもうミシエルの身近に迫っているのである。秘書が彼らの前を通る。ヴィタルは「お嬢さん？最近、トルマチョフさんに会いに誰も来なかったかね？」と尋ねる。秘書は「はい...、5分前に...、かなり背の高い男の人が...」と言うので、別の警部が（飛び跳ねて）「あー！...畜生！」と飛び出る。ヴィタル警部は彼も飛び跳ねる。秘書はトルマチョフに舌を出す。ヴィタル警部は振り向いて指で脅す。「殺人の共犯だ！...それがどういうことか知っているだろ...」。ジョルジュ・Vの地下鉄駅の階段。ミシエルは新聞を読みながら下りてゆく。二人の警部は走り、次いで地下鉄に駆け込む。ミシエルは単にシャンゼリゼを横切るために地下の通路を利用しただけだった、そして反対側に再び上がってくる。彼は「殴られる男」というハンフリー・ボガードの演じる映画を組んでいる「シネ-シャンゼリゼ」のポスターと写真を見つめるためにやって来る。（注：ハンフリー・ボガードは『三つ数えろ』などのハードボイルド映画で有名な男らしさを代表するアメリカの俳優。ボギーは愛称。ミシエルの理想の男を示す）。ミシエルは（ポスターの前で）「ボギー！...」と語りかける。ミシエルはボガードの肖像を見つめる。ボガードの大きなショットがインサートされる。彼は群衆のなかへ遠ざかる。パトリシアと再会したミシエルは「男が死ぬのを見た」と言うと、パトリシアが「何故死んだの？」と尋ねるので、ミシエルは「事故でさ」と答える。パトリシアが「私を夕食に招待してくれる、ミシエル？」と言う。ミシエルの手がそっと開く。その手の中には、2枚の硬貨、一つは新フラン、もう一つは10サンチーム。ミシエルは相変わらず文無しなのである。だがミシエルは「勿論だとも！... (Evidently!）」と英語で言う。

大通り——昼

ミシエルは駐車している車のフェンダーに背をもたせ掛けている。ミシエルが「再び電話してくる。待ってるかい？」と言うと、パトリシアは「レストランから電話しなさい」と命令するが、ミシエルは「いいや... (彼は自分の帽子を脱いでそれをパトリシアに被せる)。すぐに戻ってくる」と答えて立ちさる。パトリシアは「フランス人はいつも5分と言う代わりに1秒と言う」と不平の言葉を述べる。

カフェ——室内

ミシエルは通りそして「男性用洗面所」と読めるドアを超える。彼は手を洗う。一人の男がトイレ室から出てきて進む。ミシエルは彼をこっそり観察し、男子用便所の方へ行く、反対に男は彼と入れ替わりそして手を洗う。男子用便所から、ミシエルは彼の背後に進み、そして、空手チョップで、彼の「うなじに一撃」する。男は崩れ落ちる。ミシエルは彼をトイレ室にすべり込ませる。彼は自分のポケットにお札を入れながら一人でそこから再び出てくる。ミシエルは金がなければ強盗してそれを奪う根っ

からの向う見ずなやくごなチンピラなのである。

大通り——戸外 昼

パトリシアは歩いている。ミシエルが彼女の後ろにやって来る。ミシエルが「何処に行こうか？」と尋ねると、パトリシアは「何処へでも！（彼女は帽子を彼に返す）サン-ミシエルへ」と答える。ミシエルが「今夜、一緒に寝ようか？」と誘うと、パトリシアは「私は分からないわ」と一応断る。ミシエルが「何故だい？...俺とではよくないかい？」と聞くと、パトリシアは「いいえ、いいわ」と答える。ミシエルは、（彼の新聞を折り畳んだ見せて）「さっき、フランス-ソワール紙で、かなり面白い記事を読んだ！...女の子を誘惑するために五百万盗んだバスの収入係のことだ。彼は自分を金持ちのタレントのマネージャーと偽っていた。彼らは一緒にコート〔ダジュール〕へ下った。三日以内に、彼らは五百万を使い果たしたそしてそこで、男は、怖じ気づかなかった。彼は娘に言った：「あれは盗んだ金だ。俺はごろつきだ、しかし君をとっても好きだ」。そして俺がすばらしいと思うのは、娘が彼を見捨てなかったことだ。彼女は彼に言った：「わたしも、あなたがとても好きよ」。彼らは一緒にパリに再び上り...、そして彼らがパツシー（注：パリ16区の高級住宅街）の豪邸に押し入った時彼らはパクられた。彼女は、見張りをしていた...彼女の側からの優しさだ！...」。ここでミシエルは男を裏切らない女であることを願う自分の気持ちをパトリシアに望んでいることを間接的に伝えようとしているのだろう。そこへ兵士が立ち止りそしてミシエルの方に向く。「すみません...、少し火を持っていますか？」と頼むのに対して、ミシエルは「いいかい、ほら、100スーあるそれでマッチを一箱買え」と言い放つ。驚いて、兵士は走り去る。彼はパトリシアは腕時計で時間を見る。「ちえっ！...完全に忘れていた、ミシエル。私は行かなければならない...人と会う約束がある」と突然言い出す。ミシエルが「誰と？」と尋ねると、パトリシアは「あるジャーナリストと...、シャンゼリゼで、その人はプレスの講演に私を連れて行くことになっているの」と説明する。ミシエルが「どこでだ？...今からか？」と言うと、パトリシアは「それはあなたには関係ない。あなたは...、本当に苛立たせる」とつれなく返す。ミシエルが「それじゃ、君は俺と一緒に居ないのかい？」と更に問うと、パトリシアは「明日会えるわ...、そうよ」と言う。ミシエルは「明日ではダメだ。今晚だ、パトリシア」と強く主張するが、パトリシアは「私はあなたにそれは不可能だと言ったでしょ」と譲らない。（彼はパトリシアの肩の周りに腕をまわす）「何故君は残酷なんだ？」と言う。パトリシアは（身を振りほどき）どこにタクシーがあるかしら？」と言うので、ミシエルは「よし、いいだろ...俺の車がオペラ座にある。君は俺が君を送って欲しい？」と提案すると、パトリシアは「オーケー！」と答える。

パリの通り——昼

ミシェルは鞆を畳んだオープンカーのハンドルを握っている。パトリシアが「それであなたのフォードは、もう持っていないの?」と問うと、ミシェルが(運転しながら)「あれは修理中だ。いいだろう! ...俺は君と一緒にいる」と更に言い寄ると、パトリシアは「いずれにせよ、私は頭が痛い」と言うので、ミシェルは「一緒に寝なくていいんだ、でも君の傍にいたいんだ」と訴える。しかしパトリシアは「いいえ、そうじゃないの、ミシェル! ...何故あなたは悲しげなの?」と答え、ミシェルは「だって! ...俺は悲しい」と言う。パトリシアが「バカね。何故悲しいの? ...vous か tu で云う時どちらがいい?」と聞くので、ミシェルは「同じさ! ...俺は君なしではいられない」と更に訴えるが、パトリシアは「あなた大丈夫よ」とつれなく応じない。ミシェルは「そうだな、しかし俺は望んでいない... 見てみる、タルボ(注:自動車の名前)だ! ...美しい! ...2500 CC...」と言うとパトリシアが「あなたやっぱり男の子ね...」と呟く。ミシェルが「何だって?」と聞くと、パトリシアは「知らない」と答える。ミシェルはパトリシアに次のように言う。「パトリシア、俺を見ろ(彼女は他方に顔を向ける)。君にその男に会うことを禁ずる。ああ! ...ああ! ...ああ! 俺はとても綺麗な項、とても綺麗な胸、とても綺麗な声、とても綺麗な手首、とても綺麗な額、とても綺麗な膝をしている...しかし臆病な娘が好きだ」。ここにこの映画の主題、ミシエルのパトリシアへの愛と彼女の臆病さからの裏切りへの予感が示唆されている。パトリシアが(指で示して)そこよ! ...ストップ!」と叫ぶと、ミシェルは「待て! ...駐車するから... さ!」と言うが、パトリシアは「いいえ... (彼女は身を傾け、彼の頬にキスをする)。無駄だわ」と言うので、ミシェルは「よし、行ってしまえ、もう君とは会いたくない...行ってしまえ...行ってしまえ、最低だ!」と「最低(の女)」という語をここでも吐く。

クイック-エリゼ——室内 昼

パトリシアはエスカレーターの方に進みそして乗る。一人の男が立ち上がる。彼女は彼のところへ来る。ヴァン・ドゥードが「おー!」と言い、パトリシアは(彼と握手して)「とても遅れて御免なさい」と謝る。ドゥードが「あー! 大したことじゃない...坐って。これは君に約束した本だ。(彼は本をパトリシアに差し出す)。ドゥードは30歳くらいの、アメリカ人である。パトリシアは「有難う」と言う。カフェのギャルソンがドゥードの前にコーヒーのいっぱい入ったカップを置く。ドゥードが「(ギャルソンに)有難う... (パトリシアに)君に本の中の女のようなことが何も起こらないことを願うよ」と言うので、パトリシアが「ほー! ...何のこと?」と聞くと、ドゥードは「それを読みなさい、そうすれば分か

るよ...そう、彼女は子供は欲しくない、しかし手術が失敗しそしてそれで彼女は死ぬ。もしそんなことが君に起これば僕はとても悲しいだろう」と言うので、パトリシアが「よく考えてみるわ!」と答える。ドゥードが「何がうまくいってないんだい?」と問うと、パトリシアは「あー! 誰も私を見ないように地面に穴を掘ることができれば、私はそうするでしょうに」と言うので、ドゥードは「否。象のようにしなければならない。彼らは不幸なとき、知られているように、出発する...彼らは消えるんだ...」と説明する。パトリシアが「私には私は自由じゃないから不幸なのかどうか、あるいは私は不幸だから自由じゃないのかどうか知らない」と自分の意思と存在の意義というものがよく理解できないことを吐露する。これがパトリシアの最大の人間的欠点である。この彼女の怯懦が最後の悲劇を引き起こす最大の原因の一つとなる。するとドゥードは次のような話をする。「僕にひとつ物語が浮かんだ。君にそれをこれから語る。それは君の考えを変えらるだろう。それは2年前から知っている娘だ。突然、3日前、僕はこう思った。「僕たちは一緒に寝るべきだろうと彼女に言おう」。僕は以前決してそのことを考えたことがなかった。それで彼女にデートを申込み、一緒に昼食をする... (彼はタバコに火を点ける)。僕は彼女にこう言いたかった: «ほら、僕たちは良い恋人だ。僕たちは一緒に寝るべきだと思う...»。...会うために! ...そんな風に! ...そしてよく分からないけど、そのことが僕の頭から完全に抜けてしまった。(彼はタバコを吹かしそして少し不自然な笑いをする)。僕たちは互いに別れた...突然、僕はそのことを再び考えたそして、すぐに、僕が僕たちは一緒に寝るべきだと彼女に言うのを完全に忘れたことを彼女に告げる気送速達(注:局と局を結ぶ気送管による郵便伝達装置;パリで使用されていた)を彼女に送った。3時間後、「この一致は驚くべきことだわ、私は昼食に来るとき同じ考えをちょうど持っていた」と彼女が云う彼女からの気送速達を受け取る」。その話を聞いた後、パトリシアは「私に書くことを許すあなたの計画はどうなっているの?」と尋ねると、ドゥードは「君は、君も知る、小説家のパヴェレスコにインタヴューするために明日オルリー(空港)に行く」と指示する。パトリシアは「素敵! 何時に?」と問うと、彼は立ち上がりそして自分の新聞をとって、「明日の午後早く会社に丁度来てくれ。それじゃ僕は行く...勿論僕と一緒に来るだろ...」と答える。彼女は立ち上がる。彼は腕をパトリシアの肩に回す。パトリシアは「勿論! 勿論? ...勿論!」と言う。ここでパトリシアの望みは、その技能があるかないのか不確かなのに、新聞に記事を書くチャンスを得て、ジャーナリズムの一角に居場所を得ることであることが示されている。この望みがパトリシアにミシエルの裏切らせる大きな外的要因の一つである。彼は彼女の後ろを階段を降りる。ミシェルが奥の部屋に居て、軽やかに身を隠しながら彼らが出てゆくを見る。彼はとても怒り狂ってそして悲

しんだようにみえる。

シャン-ゼリゼ大通り——午後の終り

パトリシアとドゥードはアラン・レネの《24時間の情事》のポスターを張っている映画館(《ノルマンディ》)の前を通過する。ドゥードは自分の車の方へ進む。カップルはそれに乗る。ミシェルは隣の新聞のキオスクの前にいる。ミシェルが「フランスソワール、これは最新版か?」と聞くと、売り子は「はい、ムッシュー、... 8番目の最新版です」と答える。ミシェルはゆっくりと振り返りそして見つめる...ドゥードとパトリシアは、車の中で、口にキスし合っている。ミシェルは足を踏み鳴らし、罵りの言葉を投げる。

トロカデロ広場——夜明け

バスの停留所で、パトリシアは降りる...彼女は通りを横切りそして、子供のように、歩行者用の横断歩道の各鉄の上を努力して歩く。

パトリシアのホテル——入口のホール——昼

パトリシアは鉤棚へ行き升眼に手を入れる。彼女は自分の鍵を見つけられない。パトリシアが「私の鍵はないの?」と聞くと、男は「あなたはドアにそれを置き忘れたに違いない、と推測する」と言う。

パトリシアの部屋

ここで映画史上名高い20分にわたるラヴシーンが展開される。松浦寿輝はその『接吻論—官能的距離の背理』の中でこの場面を取り上げ、「指名手配中のベルモントがひとときの避難所を求めてセバグのアパートに転がりこみ、さして深い関係にあったわけではないこのかつての女友達と強引によりを戻そうとするとき、手厳しくはねつけることもしないかわりに積極的に応じようともしないセバグは、二人の間の距離が零になる瞬間を曖昧な逃げ腰で引き延ばしつづける。ひたすら性急に女の肉体を求めるベルモントも、けだるい媚態とともに男の欲望をはぐらかしつづけるセバグも、あたかも映画の虚構のなかで恋人同士を演じなければならない自分たちに照れながら、もっともらしい接近からもっともらしい密着へと至る心理主義的な恋愛シーンだけは避けたいと願っているかのようだ。やがて、密着の瞬間はたしかにふと訪れる。だが、ここで事件の到来を描写している画面の連鎖はまことに奇妙なものである」(注:松浦寿輝『映画n-1』、筑摩書房、p.81-82)と指摘しているが、このシーンは通常のラヴシーンとは異なる極めて不思議なリアルさと新しさを持っている。ミシェルがシーツの中に寝ている。

それを見たパトリシアは「おー、ちえっ、なんてこと!」と吐く。ミシェルが「おはよう(《Buon...giorno!》)」とイタリア語で挨拶すると、パトリシアは「でもそこで何してるの?」詰問する。ミシェルが「クラリージュ(注:8区フランソワ一世通りにある古い家具で有名なホテル)にもう空きがなかった。それで、ほら...俺はここに来た...下で君の鍵を取った」と言うので、パトリシアは「あなたは他の処に行くこともできるでしょうに、クラリージュだけではないわ」と非難の口調で告げる。ミシェルが「そうだな、...俺はいつもクラリージュに投宿している」と嘘をつき続けるので、パトリシアは「あなたって、完全におかしいわ」と怒る。ミシェルが「おいおい、...膨れ面をするな!」と言うので、パトリシアは「私を一人にしといて;私は望む時に決して一人になれない」と英語で不平を述べる。彼女は鏡の前に行く。ミシェルが「それ(注:膨れ面)は君にはとても似合わない」と言うので、そのフランス語の表現を知らないパトリシアは「faire la têteって何のこと?」と聞くので、ミシェルは「こんな風にすること...」と言って、口で一連の翳め面をする。彼女は鏡に向かって、同じようにする。パトリシアは「私は、それは私にとっても...とてもよく似合うと思う」と言う。彼女は再び寝室に来る。ミシェルは「君は俺よりさらにおかしい。いやになる!...俺はいつも俺に向いてない女の子に関心を持つ。(彼は呼ぶ)パトリシア!君は俺が昨日の晩君たちの後を付けているのを見た。答えろ...どうなんだ!」と言う。パトリシアはベッドの縁に座る。彼は彼女の傍に来て、今度は彼も座る。ミシェルが「返事をしろ...どうしたんだ?」と尋ねると、パトリシアは「私のことはほっといて、考えごとしているの」と言うので、ミシェルは「何を?」と問う。パトリシアは「困ったことは、私はそれを知ることさえないことよ」と言うので、ミシェルが「俺は、知っている」と答えると、パトリシアは「いいえ、誰も知らないわ」と断言する。ミシェルが(ベッドの中、シーツの下に再び身を置きながら)君は昨日の晩のことを考えている。そうだ俺は君が帰らなかったことをよく知っている...」と言うのに対して、パトリシアは「昨日の晩、私はとても怒っていた...今は分からない...私にはどうでもいいこと。そう、私はなにも考えていない。(彼女は、毛布の中にほとんど顔を隠しながら、ベッドの横方向に寝そべる、次いでゆっくりと顔を持ち上げそしてため息をつく)。私は何か考えたいと思っている...でもうまく出来ない」と言う。ここでパトリシアが人生においてそして自己において肝心なことは何かについて確固とした信を持たない曖昧な女の子であることが描き出されている。このことが物語の最後の彼女の裏切りを生む要因になっていると言えるだろう。彼はベッドの上に乗っている。彼女は四足でベッドの上に来て彼の傍に来る。ミシェルは「そう...俺は疲れている...とても疲れているそれで再び寝る」と言う。彼はシーツの下に隠れる。彼女はベッドの上に膝擦りしているそ

して柔毛で覆われている熊を腕の中に抱いている。彼はシーツの下から顔を出す。ミシェルが「何故俺を見つめるんだい？」と聞くと、パトリシアは「なぜならあなたを見つめているから」と同語反復の返事をする。ミシェルが「君は昨日、俺と一緒に留まるべきだった」と咎めると、パトリシアは「私には出来なかった」と抗弁する。ミシェルが「君はとてもうまく出来た。あの男に彼と会うことは出来ないと言ひさえすればよかった」と主張すると、パトリシアは「でも彼に会わなければならなかった。彼は私に記事を書かせてくれるの。それは私にとってとても重要なことなの、ミシェル」と説明する。この言葉から、パトリシアにとって当面の一番重要なことは新聞に記事を書く仕事をもらうことであることが再確認される。しかし「いや、重要なことは、俺と一緒にローマに行くことだ」と自分の願望を再度強調するミシェルに、パトリシアは「そうかもしれない。私には分からない」と答える。ミシェルが「彼と寝たのか？」と嫉妬して尋ねるのに対して、パトリシアは(躊躇い)「いいえ」と言うので、(彼はシーツの下に顔をかくす)「俺はイエスに賭ける」と言う。パトリシアは「ミシェル...分かるでしょ、彼はとても優しい。彼は私にいつか一緒に寝るだろう、でも今日じゃないと言ったわ」と答える。ミシェルは(顔を露わして)、そんなこと分かったもんじゃな...奴は(君には)俺って言うものがあることを知らない」と主張する。(彼はシーツの下に顔を隠す)。パトリシアは「あなたのことじゃないの。彼と私。私たちはモンパルナスにいた。一杯飲んだ」と言うのに、ミシェルが(再びその顔を露わして、驚いて)「モンパルナスに？俺もそこにいた...何時に？」と聞くと、パトリシアは「知らない。私たちは長く留まらなかった。(彼は再び顔を隠す)。何故来たの、ここに、ミシェル？」と問い返す。ミシェルが(シーツの下で)「俺かい？...何故なら君と再び寝たいと思っているから」と言うと、パトリシアは「それは納得させる理由にならない、と私は思う」と撥ねつける。するとミシェルは(シーツの下で)「勿論なる。それは俺が君のことを愛していることを意味している」と本心を告げる。しかしパトリシアは「私は！...まだあなたのことを愛してるかどうか分からない」と答える。ミシェルが(シーツの上に坐る)「君は何時それを分かるんだ？」と聞くと、パトリシアは「もうすぐ」と素っ気なく答えるので、ミシェルは「それはどうゆう意味だ：もうすぐとは？...一か月後か、一年後か？」と迫ると、パトリシアは「もうすぐ、それはもうすぐを意味する！」とはぐらかす。ミシェルが「女というものは一週間後にしてもいいと思うことを決して8秒以内にしようとは思わない。結局は同じことだ8秒も.. 8日も...あるいは何故8世紀じゃないんだ？」と嘆くのに、パトリシアは「いいえ、8日、それで結構！」と言う。ミシェルが「うん、いや、...女はいつもどっちつかずだ。俺は、それで気が滅入る... (彼は枕元のテーブル

の上のパトリシアのバックを取る)。何故、俺と再び寝たくないんだい？(彼はバックの中を探る)」と聞くと、パトリシアは「何故なら私は知りたいと思っているの... (彼は何も取らずにバックを閉じるそしてそれを再び置く)。あなたの内には私の好きな何かがある、でもそれが何かは分からない。私はロメオとジュリエットになることを願っているの」と答えるので、ミシェルは「いやはや...それは女の子の考えだ、それは！」と呆れる。パトリシアは女の子らしいロマンチストなのである。それに対してミシェルは後で見るとリアリストである。この齟齬が二人の関係の不幸である。パトリシアが「ほら、あなたは昨晚、車の中で、私なしですますことが出来ないと言っていた。あなたは私なしでもとてもよく出来るわ。ロメオはジュリエットなしですますことかできなかった、でもあなたは出来るわ」と言うのに対して、ミシェルは(自分の裸の上半身をなでながら)「否、俺は君なしではいられない」と愛を訴えるが、パトリシアは「おやおや...それこそ男の子の考えだわ」と応じない。ここに結局ミシェルの愛を信じきれないパトリシアの怯懦が見てとれる。これが最後のパトリシアの裏切りの主たる要因である。ミシェルは「俺に微笑んでくれ。(彼女は頭で否という。ミシェルは人差し指を振り上げそして脅して)よし、俺は8まで数える。もし、8まで、微笑まなければ、君の首を絞める」と言って、ミシェルの両手が彼女の首を取り囲む。彼女はじっと彼を見つめる。ミシェルは「1、2、3、4、5、6、7、7½、7¾...君はとて臆病だから君が微笑むのに賭ける」と言う。彼女は吹き出す。パトリシアは、「今日は、もうふざけたくないわ」と言う。彼女がベットの中に相変わらず坐っている彼の前を通る時、彼はそれを利用して彼女のスカートを持ち上げる。彼女は彼に激しい平手打ちを加える。彼は自分の頬を撫でる。この段階ではパトリシアにミシェルの求愛をうけられる気は少しもないようにみえる。ミシェルが「君は臆病だ；残念だ」と言うのに、パトリシアは「何故そんなことを言うの？」と問い返す。ミシェルが「君は俺を苛立たせる...、分からないけど」と言うと、パトリシアは「あなたも同じ」と言う。ミシェルが「否、俺は臆病じゃない」と断言すると、パトリシアは「あなたは私が怖がっているとどうして知ることができるの？」と問う。彼女は不器用にマッチを擦りながら煙草に火を点けようと試みる。ミシェルは「女の子はすべてうまくいくと言うとすぐにそして煙草に火を点けることが出来ないとすぐに、...それで...、それは彼女が何かを怖れているからだ...それはなにか分からないけど、彼女は怖れている...」と女性特有の臆病さへの自分の意見を表明する。パトリシアが「煙草を一本とって」と言うと、ミシェルは「否、...ちっ、チェーターフィールド(注：煙草の銘柄)はダメだ！...俺の上着をくれ。俺のタバコがポケットに入っている」と指示する。パトリシアはポケットの方に手を伸ばす。「これ？」とパトリシアが言うと、ミシェルが「よこせ」と言う。

彼女が彼に上着を投げると、ある物が落ちる。彼女はそれを拾う。パトリシアが「これあなたのパスポート？」と聞くので、ミシェルは「否、俺の兄弟のだ。俺のは車の中にある」と答える。パトリシアが「でも上にコヴァックの名が書かれている」と言うと、ミシェルは「あーそうだ、それは俺の本当の兄弟じゃない。彼が生まれた時、ママはすでに離婚していた...さあ、寄こせ... (彼は彼の上着にパスポートをしまう、ついで一気にマッチを擦って煙草に火を点ける)。分かるだろ、俺は怖くない」と自己の勇敢さを示そうとする。パトリシアが「そうは言ってないわ」と言うと、ミシェルは「よく言うよ、シャルル」と言い返す。この「シャルル」もじゃれで加えられたもので意味はない。パトリシアが「いいえ」と言い返すと、ミシェルは「君はそう言いたかったのだろう...、それに今君は怒っている...君はどうしようもない」と決めつけるので、パトリシアは「今や、もうあなたと話さないわ」と膨れる。ミシェルは「君は時々死のことを考えるかい？俺は絶えずそれを考える」と自分の危機的状況を漠然と予感していることを告げる。パトリシアが「ミシェル？」と語りかけ、ミシェルが「何だい？」と応じると、パトリシアは「私に何か優しいことを言ってよ」と頼むが、ミシェルが「何を？」と言うので、パトリシアは「分からない」と答えると、ミシェルは「それじゃ、俺にも分からない」と言うばかりである。彼女は部屋の中を歩きそして彼に灰皿を持ってくる。パトリシアが「あなたが持ってきた灰皿がとても好き」と言うと、ミシェルは「それはスイス製だ。俺の祖父はロールス〔ロイス〕を持っていた。車としてはすごい！...15年間一度もボンネットを持ち上げなかった」と自慢する。彼は彼女の胴体を捉える。彼女は身を振りほどく。彼女は一卷きの紙を取る。パトリシアが「私の新しいポスターを見た？」と言うのに、ミシェルは「パトリシア、ここに来い」と頼むが、パトリシアが「否」と言うので、ミシェルは「そうしろ、畜生、くそ！」と吐く。「ここは全然良くないわ...どこに貼ったらいいかしら？」と言いながら、パトリシアは小さなポスターを壁に広げる。彼女が背中を向けて両手をポスターに占有されているので、ミシェルは手を伸ばしそして反応できないパトリシアのスカートを軽く持ち上げる。ミシェルが「何故俺が君の脚を見た時平手打ちをするんだ？」と尋ねると、パトリシアは「私の脚だけじゃないでしょ！」と答える。ミシェルが「それは正に同じものだ」と言い訳すると、パトリシアは「フランス人はいつも物事が少しもそうでない時同じものだと言う」と批判する。ミシェルが「俺は優しいことを見つけた、パトリシア」と言うので、パトリシアは「何？」と尋ねる。ミシェルが「君が綺麗だから君と再び寝たいと思っているんだ」と言うと、パトリシアは「私は美しくないわ！」と答えるので、ミシェルが「それじゃ君が醜いから」と言うと、パトリシアは「それは同じこと？」と尋ねる。ミシェルは「そう、俺の可愛い娘ちゃん、同

じことだ」と答える。パトリシアは浴室の敷居の上にいる。パトリシアが「あなた嘘つきね、ミシェル」と言うと、ミシェルは「嘘をつくのは愚かなことだろう。それはポーカーのようなものだ、いっそ本当のことを言う方がいい。他の奴らは君は嘘をつくと思っている、...そしてそうして君は勝つ。どうしたんだい？」と尋ねる。パトリシアは、感動して、湿った目を、指で「乾かし」、ため息をつきそして彼をじっと見つめる。パトリシアが「あなたが私のことをもう見なくなるまであなたを見てるわ」と言うと、ミシェルは「俺も同じだ」と応ずる。彼女は望遠鏡のように巻いた彼女のポスターを使う。彼らはキスし合う。彼女は彼の頬を、優しく、撫でる。この場面はミシエルのパトリシアへの愛が彼女に通じ始めたことを示している。松浦寿輝はこの突発的なキスシーンの意義についてこう述べる。「やや離れたところに立ったセバークが「あなたの方が眼をそらすまで、私はあなたを見つめているわ」と呟くと、寝台から上半身を起こしたベルモントは「僕もだ」と応じて一種の「らめっこ」が始まるのだが、愛撫の前奏曲としては抽象的にすぎようこの軽い戯れのさなか、不意にセバークは、手にしていたルノワールの絵のポスターの丸めた筒の端を片目に当てるのだ。丸く切り取られた視界に、やはり生真面目な眼で見返してくるベルモントの顔が映る。ズームイン。と、次の瞬間、画面は昏を合わせた二人の顔を横から捉えた大きなクローズアップに切り替わり、今度はカメラがそこからゆるやかに引いてゆくことになるのだ。〔改行〕この接吻のどこが奇妙か。異様さは、顔と顔の接近の課程を省略し、その終着点としての密着の映像をいきなり出現させるというこの唐突さの暴力が、接吻を納得させるために映画が通常は依拠しているもっともらしさのリアリズムに亀裂を入れているという点にある。ベルモントは、あたかも小津の映画における笠智衆のようにカメラのレンズを真直ぐに見つめ返しており、ある還元不可能な隔たりが二人の瞳を引き裂いている。レンズのズームングにあらわれている通りたとえ彼の瞳が心的な接近を誘うものであったにせよ、距離はどこまでも距離として残るものであり、第一、二人の顔が空間的に接近してゆくプロセスはここにはまったく描かれていないのだ。顔と顔との間に介在してたはずのあの丸めたポスターは、いったいいつどのようにして消え失せたのか。このことあそこに離れていた二人が、次の瞬間、どのようなきっかけによってかは誰にもわからぬまますでにくちづけを交わしているのであり、まさしく事件は起こりえないことのように起こったのである。本来、映画とは操作によって伸縮はするが決して零になることはない隔たりの空間の組織化にはかならず、そのかぎりにおいて、接近を描くことはできるが密着を描くことはできないものだ。コード化された接吻表現のありきたりのモンタージュは、ここにその実践的な根拠を持っている。ところがゴダールがこの

『勝手にしやがれ』の一シーンで描いた接吻では、逆に、接近がなくてただ唐突な密着だけがある。リアルタイムでの接近の課程が欠け落ちていただけに、これはいかにももっともらしくない接吻なのである。〔改行〕だが、逆に言えば、ここでわれわれは、いつでも起こりえないことのように起こる現実の事件としての接吻と、可能なかぎり似通った体験を生きることになるのだ。接吻とは、まさしくこのような本当らしからざる体験のことでなかったか。この全篇が素人じみたい加減な画面つなぎで出来ているとも見えないわけではないこのヌーヴェル・ヴァーグ草創期の神話的作品の与えた衝撃は、映画空間の限界の内側のみずからを支えるほかない画面の連鎖が、硬直化した映画的虚構のもっともらしさのコードから繊細でまた野蛮な自発性によってずりと逸脱しようとするとき、当然すべては嘘っぽい絵空事の貧しさのなかで崩壊してゆくかと思われるにもかかわらず、実はそうではなくそこには現実の生の運動に酷似した、しかし現実そのものとは決して重なり合わないがゆえになおいっそう現実的でもある。絶対的にみずみずしい映像の運動が現出しうるのだという事実を、この接吻シーンのように具体的な細部において実証してみせたという点にあるのである。距離は一瞬のうちに破棄される。実際、ここには、光学的な距離によって記録したり再現したりすることのできるような時間は存在しない。時間は表情を越えて宙に迷っているのだ。だからこそわれわれは、セバーグとベルモントの接吻の光景に横から立ちあいながら、不可能な密着のこの唐突な出来に官能を揺すぶられて取り乱さずにはいられない。われわれは密着を、横からではなくほとんど内側から体験しているかに感じて不意を失う。まさに接吻とは、こうした起りえないことのように起こる事件のことでなかったか。これこそまさしく、シネマ＝ヴァリエテと呼ばれるものことなのではないか(注：同前、p.82-83)。パトリシアが「私のポスターを浴室に貼ろうと思うわ」と言うので、ミシェルが「電話してもいいか?」と問うので、パトリシアは「ええ」と言う。彼女がポスターをピンで止めるその間彼は手を近づけて彼女の尻を撫でる。パトリシアが「ここは、いい場所かしら、ねえ?」と問うと、ミシェルは「うん、とても良い」と答える。小ポスターはオーギュスト・ルノワールの若い娘の肖像を表現している。パトリシアが「このポスター好き?」と問うと、ミシェルは「悪くない!」と言う。パトリシアが「とても偉大な画家よ、ルノワールは」と言うので、ミシェルは「俺は悪くないと言った」と繰り返す。パトリシアが「彼女を私より綺麗だと思う?」と聞くので、ミシェルは「怖がったり驚いたりするとすぐに...、二つとも同時にだが...君は眼の中に奇妙な光を発する」と言う。パトリシアが「それで?」と問うと、ミシェルは「俺は君と再び寝たいと思うんだろう...その光のせいで...」と更に愛の想いを告白する。それを聞いて

「ミシェル!」とパトリシアは感動する。(彼女は、はだしの足を水で一杯のビデの中に入れ、浴槽の端に腰かけている)。ミシェルが「洗面所で小便をしてもいいか?」と言う。パトリシアが「私があなたに言おうとしていることを当ててみて」と言うが、ミシェルは「何の考えもない」と答える。するとパトリシアは「私妊娠しているの、ミシェル」と唐突に言うので、ミシェルは「なんだって?」と聞き返す。パトリシアは(足を洗いながら)「あなたよくちゃんと聞いたでしょ」と言う。ミシェルが驚いて「さあさあ!...誰の?...俺の?...」と聞くと、パトリシアは「ええ、そう思うわ」と答える。ミシェルが「医者に会ったのか?」と問うと、パトリシアは「昨日の朝そこに行った... (彼女は再び立ち上がり足を拭く)。医者は検査のために木曜の午後にまた来るように私に言ったわ」と答える。ミシェルは(とても乱暴に)「君は注意することができただろうに!」と批判する。彼女は困惑して悲しそうに彼を見つめる。ミシェルは(電話で)「もしもし...、エリゼ98、84、...98、84... をお願いします...アントニオは居ますか?...彼が戻って来るかどうか知ってますか?...知らない...かけ直します...ミシェル・ボワカールです」と話す。彼は電話を置き再びとる。ミシェルは「エリゼ25-32をお願いします」とまた電話する。ミシェルは受話器の上に手を置く。ミシェルは「俺に金を借りている男に電話した」と説明する。彼女はレコードを選ぶ。ミシェルは(電話で)「トルマチヨフさんをお願いします... ..やあ、息子よ!」と話す。パトリシアは電着の上にレコードを乗せようとする。ミシェルは「教えてくれ、俺はベルッチを見つけることができない...そこにはいなかった...俺は一晩中モンパルナスをうろついた。警察が!... (彼はパトリシアのほうへ顔をそれとなく向ける)。有難う、チャオ、息子よ」と言う。警察の手が近くまで迫っていることをミシェルは知る。彼は受話器を置きそして浴室の方へ飛び、よろめく。ミシェルが(起き上がりながら)「おー!...ちえ!」と吐くと、パトリシアが「どうしたの?」と尋ねる。ミシェルが「滑った...それは死刑囚の物語を俺に思い出させる。知ってるかい?」と聞くと、パトリシアは「いいえ」と言うので、ミシェルは「死刑囚が死刑台に上る;彼は階段の上で滑ったそして言った:「やっぱりついてない!」...」という小話をする。ミシェルはパトリシアの顔を両手にとりそしてそれを自分に近づける。彼らは黙ったまま互いに見つめ合い、ついで彼はそれを放す。彼女は髪を再び整え始める。ミシェルが「近くから見ると...君は火星人のような顔をしている」と言うので、パトリシアは「ええ、知っている...私はほんやりしているから」と答える。ミシェルが「なんて奇妙な考え...あーそれは!...子供を身ごもったからだ!」と言うと、パトリシアは「でもそれは確かなことじゃない、ミシェル。単にあなたがどう言うか知りたいただけ」と答える。子供を身籠ったかもしれないと相手に告げることは、愛の確認を望む女性特有の常套手段である。ミ

シエルは「何故真っ裸にならないんだい」と言って、彼女は彼女のすぐ近くに近寄りそしてパトリシアのブラウスのつり紐を外した、ついでそれを元に戻した。パトリシアが「そんなことして何になるの?」と問うので、ミシェルは「アメリカ人というのはバカだ」と決めつける。パトリシアが「私には何故だか分からない」と言うので、ミシェルは「否(いや)そうだ。その証拠は、君たちアメリカ人がラ・ファイエット(注: フランスの政治家(1757-1834)。アメリカ独立戦争に参加。帰国後「人権宣言」を起草。バスティーユ事件後パリ国民軍司令官になったが、シャン・ド・マルス事件でパリ市民に発砲し人望を失う)やモーリス・シェヴァリエ(注: フランスの歌手、俳優(1888-1972)。28年に渡米、ルビッチ監督のミュージカル映画「Love Parade」など、カンカン帽に、蝶ネクタイをしめ、フランス語なまりの英語で歌うスタイルで人気を博した)を大好きなことだ...、他方それは正にすべてのフランス人の中で最も間抜けな奴だ...」と説明する。ミシェルは「さあ、電話する。(電話して) ベル-エピヌ35-26、...パトリシア、ここに来い...もしもし...マンサールさんは? ...今日の午後居ますか?」と言う。パトリシアは数字をよりよく見つけるあるいは留めるために指で数える。ミシェルは「彼に会いに行くと言って下さい。(パトリシアは手で顔を覆う)。トニの紹介で電話している... (彼女は手を半分開けそして鏡の中の自分を見つめる)。...マルセイユから...ラスロ・コバックだ。...彼の処へアメリカ女を連れてゆく」と話す。相変わらず鏡の前で、パトリシアは、微笑んで、軍隊式の敬礼をする。パトリシアは「大丈夫!」と英語で吐く。つまり彼女は生理からの日を数えて妊娠の可能性がないことが分かったことを言っているのである。彼女は寝室に戻ってくる。パトリシアが「アメリカ女?」と聞くと、ミシェルは(電話して)「ラスロ・コヴァックだ... (彼は受話器を掛ける)。いや違う、君のことじゃない! ...アメリカ女! ...俺のアメリカ車のことだ! 俺に金の借りのある男に出会うことが出来ない...うんざりする! ...」と言う。パトリシアが「ラジオよりレコードの方が好き?」と聞くと、ミシェルは「黙っている、考え事をしているんだ」とつき放つ。パトリシアは起き上がりベッドの上を歩く。途中で、ミシェルが彼女の尻を撫でる。彼女は振り向き激しくミシェルに平手打ちをくらわす、彼はいかなる反応も示さず煙草を吸い続ける。彼女は幾つかのレコード袋を吟味する。ここでもまだトリシアはミシエルの求愛を拒否している。パトリシアが「バッハ! ...私はそれをすべて暗記して知っている」と言うので、ミシェルは「君は何歳だ?」と問う。パトリシアは「ラジオを点けるわ」と言う。パトリシアはベッドの傍のラジオのつまみを回す。パトリシアが「100歳」と答えると、ミシェルは「そんな年齢には見えないな」と言う。パトリシアが「何故音楽が好きじゃないの?」と聞くと、ミシェルは「ものによる...、好きさ。さあ、パトリシア...、イタリアへ来い。(彼はほとんど大声で言う)。イタリア! ...ソルボンヌでの授業が何の役に立つ...、本当に!」と彼の

真の願望を繰り返す。パトリシアが「一度も試験(いっや)をうけたことないの?」と聞くと、ミシェルは「否(いや)ある。最初のバカロレアだけ。後は、ふけた」と答える。「plaqué」という単語を知らないパトリシアが「「plaqué」とって何?」と尋ねると、ミシェルは「俺は他のことをした」と言い、パトリシアが「何を?」と更に聞くと、ミシェルは「自動車(なりわい)を売った」と自分が自動車の窃盗を生業として生きてきたことを明かす。パトリシアが「ここで? ...パリで?」と問う。パトリシアの手がミシエルの目の下に何かを引き出すために通過する。ミシェルが「否(いや)...ニューヨークで、君は...しばしば男と寝たのか?」と少し嫉妬する男の常套句を吐くと、パトリシアは「そんなにしばしばではない」と答えるが、ミシェルは「何度だ?」と問うのを止めない。彼女は微笑み(いっや)そして、両手を伸ばして、7本の指を揚げる。逆にパトリシアが「それであなたは?」と聞くと、ミシェルは「俺かい?」と言って、彼は右手を五回回して開きそして一指し指で終える。ミシェルは「同じように大したことはない!」と言う。パトリシアが「私が何処に住みたいと願っているか分かる? ...メキシコなの。誰もがそこはとても美しいと私に言う。私が小さかった頃、私の父は私にいつも言っていた: « 次の土曜日そこへ行く » と。彼はいつも忘れていた」と言うと、ミシェルは「否(いや)、メキシコは俺は警戒する...そこはそんなに美しくないと確信する。人はとても嘘つきだ!? ...それはストックホルムと同じようなものだ、そこから戻ってきた奴は皆言う: « スウェーデン女たちは素晴らしい...私は一日に3度寝た...行きなさい » と。...俺はそこに行った...、それは嘘だ! 第一、スウェーデン女たちはパリにいるスウェーデン女たちの姿とはとても異なっている...そして、一般にパリジェンヌと同じ位ブスだ」と自説を述べる。ここにはフランス人のスウェーデン女性の美しさとフリーセックスの神話に対する憧れの常識とコンプレックスに対する批判が見て取れる。パトリシアが「否(いや)否(いや)...スウェーデン女性(いっや)はとても綺麗よ」と反論すると、ミシェルは「否(いや)...、否(いや)...それは繰り返して言われてきたことだ! ...一人や二人は、そうだと賛成する...正確にはロンドンやパリのような処では、しかしすべての女がそうではない。否(いや)、通りですれ違(いっや)うすべての女の子がかなり綺麗な...、最高ではないことは認めるが、君のように...魅力的な...唯一の都市は、うん、そうだなあ...20点満点で15点つけられる女の子、なぜなら彼女たちはみんな何か持っているからだけど、...それはローマでも、パリでも、リオデ-ジャネイロでもなく...ローザンヌとジュネーヴだ」と主張する。ゴダールが生まれはパリだがスイス育ちであることを思い出せば、ゴダールの(いっや)引倒しの面白い見解である。ミシェルは彼女にキスしようと頭を傾ける、ついでその額を彼女の肩に置く。ミシェルが「君も、俺に何か優しいことを言ってくれ」と言うと、パトリシアは「でも、私も、分からない」と答える。彼女は

身を振りほどく。ミシェルの手が彼女の腕を撫でる。ミシェルが「もし他の男と一緒にいたら、君は彼に愛撫するがままにさせるのだろうか?」と問うと、パトリシアは「分かるでしょ、あなたは私が怖れていると言ったわ、ミシェル...それは本当だ; 私は怖れている何故なら私はあなたが私のことを愛することを望んでいるだろうから...そして分からないけど、同時に、あなたが私をもう愛してないことを望んでいるだろうから...私はとても素直じゃない、分かるでしょ!」と恋に陥ることの不安を口にする。彼は彼女を抱きしめる。ミシェルが「それで? ...俺は君が好きだそして君が信じているようにではない」と言うと、パトリシアは「どういうこと?」と問うが、ミシェルは「君が信じているようにではない」と同じ言葉を繰り返す。パトリシアが「あなたは私が信じていることを知らない」と言うと、ミシェルは「否知っている」と答える。パトリシアが「あなたは私が考えていることを知らない」と言うと、ミシェルは「否知ってる」とまた同じ返事を繰り返す。それに対してパトリシアは「いいえ。それは不可能だわ。私はあなたの顔の背後にあるものを知りたいと思っている。私はそれを10分前から見つめているそして何も分からない...、何も...、何も。悲しい、でも怖い」と説明する。ここにはパトリシアの本当の恋愛に対する晩熟な性格がよく示されている。このパトリシアの恋愛に対する怯懦が最後の彼女の裏切りの原因である。そのことが最後の悲劇に通じてゆくのだが。ミシェルが「かわゆく優しいパトリシア!」と愛を訴えようと、パトリシアは「おー! ...いいえ」と言うので、ミシェルは「そう...それじゃ残酷で、愚かで、血も涙もない! ...ひどい、臆病な、軽蔑すべき! ...」と貶すと、パトリシアは「そう...、そう」と応ずる。ミシェルが「君は唇に口紅の引き方さえ知らない。残念だ! ...突然、俺は君を恐ろしく思う」と言うが、パトリシアは「望むことを言って、私にはどうでもいい。それら全部を私の本の中に入れるわ」と言う。ミシェルが「どんな本?」と聞くと、パトリシアは「私は小説を書いている」と答える。ミシェルが「彼は彼女の顎をとる」[君が?』と問うと、パトリシアは「何故私じゃだめなの? ...あなた何するの?」とミシエルの行為を咎める。ミシェルが「君のセーターを脱がす」と言うと、パトリシアは「少し身を振りほどきながら」[今はダメ、ミシェル]と拒否する。ミシェルが「おー! ...君は苛立たせる。どういう意味だい?」と文句を言うと、パトリシアは「彼女は一冊の本を手取る」[ウイリアム・フォークナー(注: アメリカの小説家、1897-1962)を知っている?』と問う。ミシェルが「否...、それは誰だ? ...彼と寝たのか?」と尋ねるので、パトリシアは「違うわ、坊や」と言う。ミシェルは「それじゃ、俺にはどうでもいい...ジャージのセーターを脱げ」と焦る。パトリシアが「それは私の好きな小説家なの。あなた「野生の棕櫚」を読んだ?」と問うと、ミシエ

ルは「ないと言ってるだろ... セーターを脱げ」と繰り返す。彼が彼女のセーターを取ろうとするので、彼女は彼にそれを妨げ、本を開く。パトリシアは「聴いて。最後の文章が、とても美しい: « Between grief and nothing, I will take grief »。(彼女は訳す)。悲しみと無の間に、私は悲しみを取る...あなたはどちらを選ぶ?」と問う。ミシェルはそれに答えず「君の足の指を見せろ...女には指の足がとても重要だ。まじめな話なんだ」と言う。パトリシアが「どちらを選ぶ?」とまた聞くので、ミシェルは「悲しみは、馬鹿げている。俺は無を選ぶ。それは良くない...、しかし悲しみは、妥協だ。全か無が必要だ。それから、今や、俺は知っている...分かった!」と答える。これはミシェルが感傷主義者でなく、ハードボイルドなリアリストであることを示す言葉である。それに対してパトリシアは「ロメオとジュリエット」のような恋に憧れるロマンチックな娘である。二人の性格の違いが鮮明になっている。「何故君は眼を閉じるんだ?」とミシェルが聴くので、パトリシアは「すべてが黒になるようにとても強く眼を閉じようと試みている。でも出来ないわ。決して完全に黒にならない」と答える。ミシェルが「君の微笑みを横顔から見ると、それが君のいいところだ。それこそが君だ!」と誉めるので、パトリシアは「(耳の処に帽子を被り)「それが私! ...。(彼女は笑う)。眼と眼で見つめ合う...、それはなんの役にも立たない」と言う。ミシェルが「パトリシア・フランキーニ」と名を呼ぶと、パトリシアは「その名前大嫌い。イングリットという名前がいいわ」と主張する。ミシェルが「膝まづけ」と言うので、パトリシアは「(ベッドの上、彼の前に膝まづく)「どうしたの?」と聞く。「皆さん...終わります、...この放送を...トッカータ、唯一の主題の変奏曲、作者によって提供されたナディア・タグリヌの放送です」と言うラジオの音声が流れる。ミシェルが「俺は君を見つめている」と答えると、パトリシアは「フランス人もバカだわ」と言う。ミシェルが「俺は君が俺と一緒に留まることを願っている」と言うと、パトリシアは「いいわ」と応ずる。「(彼女はシーツの下に滑り込む)。「ネットワークの周期調整作業を行うために放送をしばらく中断します」というラジオの声が流れる。彼は同時にシーツの下に隠れる。パトリシアが「奇妙だわ」と言うので、ミシェルが「何が?」と問うと、パトリシアは「あなたの眼の中に私の光を見る」と答える。ミシェルが「俺は笑うなぜならこれが本当のフランス-アメリカの接近だから」と言うと、パトリシアは「幸せな時の象のように身を隠す」と応ずる。ミシェルは「女の腰は...、とても感動的だ」と言う。パトリシアが「暑すぎる」と言うので、彼はベッドの上に坐り、毛布を引っ張る、次いでそれをシーツの下に戻す。ミシェルが「それでも君を愛撫しているのが俺とは別の男だったら、君はどうでもいいのだろうかそれとも違うかい?」と尋ねると、パトリシアは「あなたは私にもうそれを尋ねたわ」と答え

る。「音楽を聴きながら働きなさい」の放送が始まります。今度はあなたが、音楽を聴きながら働きなさい」というラジオの声が聞こえる。シャツが強く揺れる。遂にパトリシアはミシエルの求愛を受け入れ、彼らは愛し合ったのである。だが、しかし...パトリシアの手が現れる。ラジオを消す。パトリシアが「ほら、消した! ...」と言う。彼女は浴室に行く。ミシエルのシャツを着る。パトリシアが「あなた「子犬のような芸術家の肖像」という名のディラン・トマス(注:イギリスの詩人。言葉とリズムに新機軸を打ち出す。(1914-1951)の本を知っている?」と尋ねる。ミシエルは(歌って)「日曜の朝は朝寝坊するための夢の時...」と唄う。パトリシアが「服をきるわ」と言うと、ミシエルが「何時だ?」と聞くので、パトリシアは「正午」と答える。ミシエルが「良かったかい?」と尋ねると、パトリシアは(身を振りほどき)「イエス、サー」と英語で返す。ここでパトリシアはミシエルの愛を受け入れ、性愛的合一を遂げたことが示される。

しかしこのようにパトリシアの愛を得たことが、ミシエルの破滅の道へと繋がるという逆説が生じる。つまり、ミシエルは何も「失うべきもの」を持たない孤独なチャンピオン青年である。彼の強さはその孤独の中にある。孤独である限り、誰も彼を打ち倒すことが出来ない。しかし「愛すべきもの」、「失うべきもの」(=パトリシア)を所有した時、彼はその強さを喪失し、その「非害性」を失う負の刻印を帯びる。それは彼にとって致命傷となり、最後には命を落とす。それ故ミシエルには念願のパトリシアの愛を得たにもかかわらず、「幸せな愛はない」のである。

続けてミシエルが「今夜まで眠る」と言うと、パトリシアは「いいえ。(彼女は起き上がる)。ワンピースを買わなければならない。車持っている?」と尋ねるので、ミシエルは「俺の車?...うん...うん...」と答える。彼女は彼女の方に身を傾け、彼の頬にキスをする。「お早う」とパトリシアが言う。彼は電話の受話器をとる。ミシエルは「エリゼ99-84...もしもし、今日は マダム;アントニオは立ち寄りましたか?...おやおや!...困った!...彼が何処にいるか知らないですか?...そう、仕方ない...相変わらずミシエル・ボワカールです」と電話する。パトリシアが「ブラジャーを着けて欲しい、ミシエル?」と聞くので、ミシエルは「お好きなように、ベイビー」と英語で返す。パトリシアが「あなたは私の眼あるいは私の口あるいは私の肩どれがより好き?もしあなたが選ばなければならないとしたら...」と尋ねるのを、ミシエルは遮って「君のジャーナリズムの講演は...法螺^{ほら}だった、そうだろ?」と聞くと、パトリシアは「いいえ。それはすぐ後に、オルリー?(空港)で」と答える。ミシエルが「俺は特別にハンサムではない、しかし偉大なボクサーだ。(彼はボクシングの闘いの真似をする)。君は何処に行くんだ?...そのジャーナリズムの講演に?」と言うと、パトリシアは

「まずオフィスに寄らなければならない」と答える。ミシエルが「送っていくよ」と言い、パトリシアが「よろしい!」と英語で応ずる。ミシエルは再びラジオ受信機を点ける...そしてつまみを回す。「今日の午後、それゆえ、アイゼンハワー大統領は、ド・ゴール將軍を伴って、凱旋門に赴き無名戦士の墓に花束を置くだろう、次いでシャンゼリゼを下って、彼は...」とラジオの音声流れる。パトリシアが「あなた戦争に行ったことあるの?」と聞くと、ミシエルは「ある」と言うので、パトリシアが「それで何をしたの?」と聞くと、ミシエルは「歩哨をばらした」と答える。パトリシアは「ばらす」という単語を知らなかったので「«zigouiller»って何?」と問う。彼女は仰向けに横たわる。彼の方は彼女の方へ身を傾ける。ミシエルが「俺はこんな風に彼らを倒していた」と言って彼女にキスしようとするが、パトリシアは「だめ、ミシエル」と拒む。ミシエルが(彼はパトリシアの胸に頭を置く)「俺は疲れた。死ぬだろう」と言うと、パトリシアは「あなたおかしいわ」と言う。ミシエルが「そう、俺は完全に気が狂っている」と言うと、またその単語の解からないパトリシアは「«dingue»って何?」と聞く。ミシエルは「俺のことさ」と答える。こうして20分に亘るラヴシーンは終わる。しかしパトリシアの愛を得たミシエルは警察の追及が迫る中、自分の取り分の金を手に入れることに執着しパリを彷徨^{ほうこう}する。そしてその愛を得たと信じるパトリシアの思わぬ裏切りによって、悲劇的な最後を迎える。しかし何故パトリシアはミシエルを裏切るのだろうか。それがこの映画の後半のテーマである。

パリ——戸外 昼

恋人たちはカフェのテラスのテーブルについている。パトリシアが「あなたの車ないの?」と聞くと、ミシエルは「うん...、否...、うん...車庫にある。取りに行くそれから行こう」と答える。ミシエルは走って大通りを横切る。彼は駐車している車を調べながら歩く。彼は幌を折り畳んだオープンカーの方に近づきダッシュボードを調べる。遅い背の高い男が、とても驚いて、彼を見つめる...そして進んでくる。ミシエルは別の通りで再び見出される。幌を折り畳んだ白いオープンカーを運転する男が歩道に横付けし、車から降り、そして通りを急いで行く。すぐに、ミシエルは車の周りを回る。彼は自分に眩きながらダッシュボードの方に身を傾ける。ミシエルは「こいつはいい!...フォードだ!...」と吐く。彼は車の持ち主の通った方向に突進する。

ビル——入口のホールの内部+エレベーター

ミシエルは男の後を行く、男はエレベーターのドアの方に近づく。ミシエルが「何階?」と聞くと、男は「6階」と答える。エレベーターが止まる。男はドアを開け、ミシエルを通させようとする。ミシエルが「階を間違えた」と言うと、男

は「あ...そう」と言う。彼は外に出る。ミシェルは一階のボタンを押す。彼は降りる。

通り

ミシェルは車の方に走り、ドアを開ける。彼はすさまじい勢いでスタートする。彼はテラスの前で止まり、ドアを開ける。パトリシアは立ち上がる。パトリシアが「あなた老いることが怖い？私は怖い」と言うと、ミシェルは「君は愚かだ...既に欠点の中で最も悪いのは、臆病だと言っただろ」と答える。パトリシアが「ディオールで私にワンピースを買ってくれる？」とねだると、ミシェルは「絶対だめだ！プリズニック(注:安売りのスーパー)で10倍も綺麗なワンピースがある。そうだ、ディオールで、ワンピースを買うべきではない、電話しなければならぬ。君も知るように、それはただで電話することが出来るパリの唯一の場所だ。外に直接接続されている12の電話ボックスがある」と金のないことを隠すため自説を述べる。車は往來する鏡り売りの新聞屋の近くの歩道に沿って駐車しに来る。新聞の販売人が「フランス-ソワール！...フランス-ソワール！...フランス-ソワール！...」と叫ぶ。パトリシアは車を降り、他方ミシェルは販売人に合図する。ミシェルが「おおい、フランス-ソワール」と声をかけると、販売人は(身を傾け)「はい、ムッシュー」と応ずる。パトリシアは「少し時間がかかるそれから戻ってくる」と言って車を降りる。販売人が(ミシェルにお釣りを返して)「どうぞ。有難う、ムッシュー」と言う傍から、一人の男が「フランス-ソワール！なんだよ、フランス-ソワール...をくれ」と呼ぶので、販売人は「どうぞ、どうぞ！...」と言う。ミシェルは車の中で新聞を読む。若い男が、パイプを吹かして、歩道の上に立って新聞を買う。ミシェルは新聞を読むことに再び没頭する。「ローマのスタジオで端役であった時のミシェル ポワカール」という説明文と共にミシェルの写真の複写がインサートされる。『国道7号線の殺人者はいまだ逮捕されない』。パイプの男はミシエルの方角に何度もちらっとした視線を投げる。ミシェルは、帽子を眼の上で下げ読み、レンズの上でよりよく見るために、鼻の先に眼鏡を下げながらそっと眼を上げる。男は新聞を読む。ミシェルは再び新聞を読むのに没頭する。車とは反対の歩道に、パトリシアが「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」という場所から出てくる。新聞の男はパトリシアが乗り込む車の方へ最後の視線を投げながら急いで歩く。車はすさまじい勢いで発進する。新聞の男は二人の警察官と語り合う。ここでミシェルを見咎め、警察官に通告する男をゴダール自身が演じていて、若き日の彼の姿を垣間見ることができる。

オルリー空港のテラス——陽の射す戸外

空港での小説家パルヴェレスコへのインタビューの場面である。ここでの愛の主題についての応答は、この映

画の愛のテーマについての、特にパトリシアの感情と行動の解説となっている。ミシェルが「それはどれ位続くんだ？」と聞くと、パトリシアは「30分...、分からないわ」と答え、ミシェルが「じゃ、俺は俺の探している男に会いに行こうそれから戻ってくる」と言うと。パトリシアは「オーケー！」と返す。彼女はテラスに通ずる階段を上る。ミシェルが「パトリシア！...パトリシア！」と呼ぶ。パトリシアは振り向き、そして身振りで、彼にキスを送る。ミシェルはその場で手振りをしながらボクシングをする、その時一人の男(パルヴェレスコ)がガラスのドアを押す。彼は彼とすれ違う。ミシェルはガラスのドアを押す。パトリシアは小説家に近づくためにジャーナリストたち、カメラマンたちそして映画人たちの間に巧みに入り込む。「パルヴェレスコさん、何故あなたの小説のタイトルに「キャンディダ(Candida)」(注:「純真」の意)選んだのですか？」という声がし、「パルヴェレスコさん！...あー、待ってください、それじゃ私の同僚に話させますそして...」と別の声がある。パルヴェレスコは坐りそしてジャーナリストたちに囲まれる。パルヴェレスコは「私は本が、フランスで、フランス的ピューリタニズムのせいで、かなり慎重な受容を受けるだろうと納得している」と答える。カメラマンが身振りをし、次いで狙う。カメラマンが「パルヴェレスコさん...」と声を掛け、ジャーナリストが「パルヴェレスコさん、あなたにお尋ねしたかった...」と言いかけると、別のジャーナリストが「あなたは現代においてまだ愛を信じることができると考えますか？」と問う。パルヴェレスコは「あー、勿論！...まさに現代において愛以上のものを信じることはできない」と自説を述べる。黒人のジャーナリストが「現代生活はますます一層男を女から別つだろうというライナー・マリア・リルケ(注:ドイツの詩人、(1875-1926)『マルテの手記』『ドゥイノ悲歌』などがある)の言葉をどう思いますか？」と尋ねると、パトリシアが「パルヴェレスコさん」と声をかけるが、パルヴェレスコは「リルケは偉大な詩人だった。それ故彼は確かに正しかった」と答える。別の声が「有難うございます、こちらへ。パルヴェレスコさん...少し邪魔だ...」と他の記者を押しよせようとすると、「いいかげんにしろ。おー！君は、パテ・ジュール！...さあ...」という声がある。女性のジャーナリストが「パルヴェレスコさん、フランス女性とアメリカ女性の間に異なった愛の行動があるとお考えですか？」と尋ねると、パルヴェレスコは「フランス女性と...アメリカ女性の間にはいかなる関係もありません。アメリカの女性は男を支配する。フランスの女性はまだ男を支配してない」と述べる。パトリシアがアメリカ人であることを思い出せば、映画の結末に至る素地を表しているとも言える。「パルヴェレスコさん」という声がし、パトリシアが「パルヴェレスコさん、人生におけるあなたの偉大な野心は何ですか？」と尋ねると、男の声が(パトリシアの質問の上に)「[男を]裏切る女と女を捨てる男はどちらがより道徳的ですか？」と問

う。パルヴェレスコは「裏切る女」と即答する。これがこの映画の主題そのものである。つまりパトリシアのミシェルに対する最後の裏切りは、パルヴェレスコの意見によれば「女を捨てる男」より道徳的だということになる。「パルヴェレスコさん! ...」という声がし、別の男の声が「女性は男性より感傷的ですか?」という質問が飛び、パルヴェレスコは「感情はほとんどの女性が与えられていない贅沢です」と言う。ここでもパトリシアの感傷的でないドライな性格を予告している。それをミシェルは最後の場面で思い知らされることになる。ジャーナリストが「パルヴェレスコさん、エロチズムと愛の間には差異があると思いますか?」と尋ねる。パルヴェレスコは質問をゆっくり味あうようにみえる。それに対してパルヴェレスコは「いいえ、あまりそうではない、...私は思わない...、それについては何も信じない...なぜならエロチズムは愛の一つの形でありそして愛はエロチズムの一つの形だから」と答える。ここはエロチズムと愛を一体と考えるミシェルとそうは思わないパトリシアの相違を説明する部分であろう。それが最後に見るようにパトリシアの裏切りの大きな要因である。女性の声が「パルヴェレスコさん、あなたは現代世界における魂の存在を信じますか?」と問うと、パルヴェレスコは「私は優しさを信じます」と答える。ある声が「愚かな質問をするな!」と叫ぶが、パルヴェレスコは「I believe in gentillesse」と英語で繰り返す。パトリシアが「女性は現代社会において演ずる役割があると思いますか?」と質問をすると、パルヴェレスコはパトリシアの容姿を見つめながら、「ええ...、もし彼女が魅力的で...、もし彼女が縞のワンピースを...そしてサングラスをかけているなら」と応ずる。パトリシアはパルヴェレスコの視線を保ちながら微笑む。ここはジャーナリズムの社会でキャリアを得たいと思っているパトリシアの願望を肯定しているのである。男の声が「感謝を押し付ける力で誘惑できない女はいないというカサノヴァの言葉を評価しますか?」と問うと、パルヴェレスコは「コクトー(注:フランスの詩人。その他小説家、劇作家、シナリオライター、映画監督など多方面で活躍した。1889-1963)...は「オッルフエの遺言」を通して、(それに)答えるでしょう」と応ずる。この映画のモチーフは「誰も私に尋ねるな」であり、回答を留保するという意味であろう。一人のジャーナリストが「あなたの意見では、女性は人生において何人の男を愛することができますか?肉体的にという意味ですが」と尋ねる。パルヴェレスコは手を挙げしして6あるいは7回すばやく五本の指を動かす。次いでもう一方の手で同じことをする。「すいません、お願いします...」という声がするが、パルヴェレスコは「それ以上です! ...世界には二つの重要なことがあります。男にとっては...女...女にとっては、お金...」と述べる。これは世間で一般的に言われる、男は女を容姿で選び、女は男の懐目当てに男を選ぶという見解を指しているの

だろう。「パルヴェレスコさん、お願いします」という声が再び挙がるが、男の声が「あー! ...ほらそうでしょう:あなたはベシミストです」と言うと、パエウレスコは「金のある男と一緒に綺麗な女性を見るとすぐに、彼女が、きちんとした娘であり、...そして彼の方は卑劣漢だと自動的に言うことができます」と自説を述べる。「それなら、パルヴェレスコさん...あなたの意見では、何がより価値がありますか:生きるために愛することあるいは...」という声がするが、別の声が「世界で最も知的な国はどこですか?」という質問に、パルヴェレスコは「フランス」と断言する。一人のジャーナリストが「ブラームスはお好きですか?」と尋ねると、パルヴェレスコは「皆と同様です:全然好きではない」と答える。ここはフランソワーズ・サガンの『ブラームスはお好き?』という作品を踏まえた対話であろう。そのジャーナリストが「ショパンは?」と続けると、パルヴェレスコは「最低だ!」と言い放つ。ここでも« dégueulasse »というこの映画のキーワードが出てくる。ショパンの音楽はロマンチックで感傷的すぎる、という意味での発言である。パトリシアが「人生におけるあなたの最大の野心は何ですか?」と聞くと、「パルヴェレスコさん!」と言う声を挟んで、パルヴェレスコは(眼鏡を外しながら彼女を見て)「うむ...不死になること...次いで死ぬこと」と答える。これは死すべき存在である人間の根源的な究極の願望であるだけでなく、不死身の強さを持つミシェルも最後には無残な死を迎えなければならないことの暗示でもある。

道路——自動車修理工場 戸外 昼

ミシェルは盗んだ車を物故屋に売りに来る。ミシェルは自動車修理工場へ通ずる道を通り曲がる。彼は止まる。一人の男が近づく。ミシェルが「ラスロ・コヴァックだ...、クロウディウス・マンサールは、あなたですか?」と尋ねると、マンサールは(調べながら車の周りを歩く)「ええ、コヴァックさん」と答える。ミシェルが「今朝電話した。あなたが居るだろうと聞いた」と言うと、マンサールは「ええ、コヴァックさん」と応ずる。ミシェルが「俺はトニの処から来た。」と言うと、マンサール「ええ、コヴァックさん」と同じ返事を繰り返す。ミシェルが「我々はニースで彼と会った、と思う、既に」と言うと、マンサールは「いいえ、コヴァックさん」と否定する。ミシェルが「あなたに電話があったか?」と問うと、マンサールは「ええ、コヴァックさん。オールドスモビル(注:自動車の車種)になるだろうと電話がありました」と答える。ミシェルが「そう...、しかし最後には、それは動かなくなかった」と言うと、マンサールは「それで?」と問う。するとミシェルは(車の方へ草で)それであれだ!と盗んできた車を指し示す。マンサールは車のハンドルに手を向いて座る。彼はエンジンを吹かす。マンサールが「8万」

と言うと、ミシェルは「オーケイ！」と承諾する。しかしマンサールが「唯一^{ただ}困ったことは、あなたに金を渡すのは来週になることだ」と金の支払いを渋ると、ミシェルは「あー！...だめだ、お話にならない！」と憤慨する。しかしマンサールは「コバックさん！あなたは何者ですか？」と言う。マンサールはミシェルの目の前に「フランスソワール」の「一部」を振り上げる。マンサールが「それで...、今あなたには金を渡せない」と言う、ミシェルは「致し方ない！...3時じゃないか？」と尋ねる。マンサールが「3時15分」と言う、ミシェルは「電話してもいいか？」と頼む。視線で、マンサールは彼の事務所を指し示す。ミシェルは事務所に入り、電話の方に向かう。マンサールはエンジンのコードをイジクリ回す。次いでポケットの中にコードを入れながら、ボンネットをそっと閉める。ミシェルが(電話で)「アントニオは居ますか？」と尋ねると、(受信機の中で)「あ！いいえ、立ち寄ったばかりです」という声がする。ミシェルが「あー！くそお、くそお...、ちえ！」と吐くと、「彼は4時頃、レアミュール(注：カフェの名前)か、レスカール(注：カフェの名前)に居るだろうとあなたに伝えるよう私に言いました」と電話の音が言う。ミシェルは「レスカールに何時に？...よし分かった、有難う」と電話をかけ終わる。彼は受話器を掛ける。彼はそれを利用して引き出しを開け、探る。マンサールは「あんたは時間を無駄にする...私の金は自分の身にとっておく」とすぐの支払いを拒む。ミシェルは頭を再び上げる。マンサールはドアの敷居の上にいる。ミシェルが「1万フランを前払いしてくれ...、なああ！」と頼むと、マンサールは「だめだ」と言う。またミシェルが「5千！」と言うと、マンサールはやはり「だめだ」と答える。ミシェルは「2千5百」と言う。他方の男は微笑む。ミシェルは彼を突き飛ばし、外に出る。ミシェルは車のエンジンを駆けようとするが「もう回転しない！(彼はボンネットを開けそして呼ぶ。おい...そのの！)」と叫ぶ。ミシェルは従業員に話しかけ、彼は彼の処に来る。ミシェルは「コイルのコードを取り去ったのはあんたか？」と問う。従業員は躊躇い^{ためら}いそして指でマンサールを示す。ミシェルは振り向き、彼の方に突進し、そして車庫の中で激しく押す。マンサールは「あんたは私に電話の借りがある」と言うが、ミシェルは彼の顔面に、次いで胃にストレートを放つ。マンサールは崩れ落ちる。ミシェルは素早く彼のポケットを探る。ミシェルはマンサールの金を奪って、「俺の持ってきた車だ！」と言い捨てる。ここでもミシェルはなお無敵の男として振舞っている。

タクシー——内部 昼

ここからミシェルがパトリシアを連れて警察の追及を逃れ、彼の金を預かっているアントニオ・ベルッチと会うために焦る彼の粗暴な態度が描き出される。ミシェルは「さあ...、スピードを出せ...、スピードをだせ...さあ。

歩行者に構^{かま}うな...、進め、俺はそれだけをあんたに要求する。さあ...、スピードを出せ、スピードを出せ、ちえくそ...、のろのろしてるな！... (パトリシアに話しかけて) ガシャ！...サンダーバード号の左の前の羽が全部取れた！...俺は...何でもない！俺が産まれた家を見ろ」とせわしなく言う。四階建の特異な大きな館。ミシェルは続けて「彼らは恐ろしい家を建設した。(かなり上品な現代的ビル)それが俺のモラルを破壊した、同じような家々が！...交差点の美しさもすべて今ではダメになった」と説明すると、パトリシアが「そう？」と言い、ミシェルが(彼女の顎をとり)「そうだ...、俺は美のセンスがある。美！... (彼は運転手に話しかける)。ダメだ、シャトレを連れて行け。(パトリシアに)もし俺が遅刻したら、君のせいだ」と言う、パトリシアは「絶対にそうじゃない」と答える。ミシェルが「さあ、おい君。403(注：Peugot社製の車)を追い越せ... (2列になるルノーの4CVと共に、ふらつくこの車を識別する、後にスクーターが従っている)。変速ギア装置に触るな。4CVの後ろでブレーキをとはどう意味だ。ほら...見ろ、マヌラン(注：スクーターの車種)に追い越されるな。方向指示器を出せ、左に曲がる。そこで止める... (彼はパトリシアの前を通り、ドアを開ける)。ミシェルは「戻って来る」と言う、運転手は「はい、ムシュー」と返事する。ミシェルは歩道に沿って走る。彼は立ち止り歩道を歩く娘と口論する。彼は自分の行った道を戻り、タクシーに乗り込む。ミシェルが「彼は5分前に行ってしまった」と言う、パトリシアは「あなたにお金を借りている友達？」と聞く。ミシェルが「アントニオ・ベルッチ...そうだ！君のせいだ！...今やるかそるかだ」と言うので、パトリシアは「何故？」と聞く。警察に追われていることを知っているミシェルは無事に金を受け取ることができるかどうか賭けているのだ。ミシェルが「後で説明する。(運転手に) さあ、運転手さん、2CVの後ろに留^{とど}まるな... (パトリシアに) 今から何処へ行くんだ？」と問うと、パトリシアは「ニューヨーク・ヘラルド」と答える。運転手は、走りながら、考え込んでいるパトリシアを識別しようとバックミラーの方に頭を回す。ミシェルが(運転手に)「あー！...頭を回すな。前を見ろ... (パトリシアに) 記事を書くことが何の役に立つんだ？」と問うと、パトリシアは「それはお金を得ることと男から自由でいることに私に役立つわ。パリジェンヌたちはあまりに短いワンピースを着てると思う。娼婦に見える」と述べる。ミシェルが「そこまで言うことはないだろう！...人は後を追って走りそしてそんな風に仕がるものだ」と言う。(彼はあたかもスカートをまくるかのように両手を上げる)。パトリシアは「どうぞ遠慮なく」と言う。ミシェルは「そこで生まれ」と言う。タクシーは歩道に並ぶ。ミシェルはそこから出て、通りを横切りそして若い女性の後を走る。彼女の背後にたどり着くと、彼は彼女のスカートをまくる；彼女は驚いて憤慨して振り返る、他方彼は彼女に挨拶するために頭で小さな合図をしそしてタクシーの方

へ走る。別の通り：タクシーは玄関口の前でブレーキをかける。ミシェルが「戻ってくる」と言ってタクシーを降りると、運転手は「オーケー」と返事する。他方の側から出るパトリシア。パトリシアが「あなた払わないの？」と聞くと、ミシェルは「さあ...来い、急げ」とタクシー代を踏み倒す。ビルの中庭：恋人たちは中庭に入りそして別の入口の方に走る。黒い通路：恋人たちは出口の方に歩く。パトリシアが「どこへ行くの？」と尋ねると、ミシェルは「シャンゼリゼだ。パリの人はみんなこの通路を知っている。彼にはいい薬になるだろう！...車体を傷つけるのを怖れるタクシー運転手は大嫌いだ。分かるだろ、ここは、戦争の間、ゲシュタポが男たち（注：レジスタンスの人やユダヤ人を指す）が彼らの支配を逃れられないように壁を建造した」と説明する。パトリシアが「ねえ、私は「フランス・ソワール」の女の娘のことを再び考える」と言うと、ミシェルが「フランス・ソワールのどの娘？」と尋ねるので、パトリシアは「そうなの...コート・ダジュールで恋人と残った娘。あなたはその娘の性格が好きだと言っていた」と説明する。それはミシェルがパトリシアに話した、五百万の金を横領したバスの収入係が恋人を連れて三日でそれをコート・ダジュールで使い果たして「俺はごろつきだ。でも君のことがとても好きだ」と告白した時も、パリに戻って強盗を働いた時も見張りをして男を見捨てなかった忠実な女性のことである。パトリシアがミシェルに対して忠実であるべきかどうか少し迷っていることを暗示しているのだろう。それに対してミシェルは「そう...、ノーマルな娘は、滅多にいない」と応ずる。パトリシアが「私と一緒に残る？、私は新聞社に行く」と言うと、ミシェルは「否...、俺は、電話をする、俺の仕立て屋に挨拶を言いに立ち寄りそして君を迎えに戻ってくる」と答える。パトリシアが「オーケー」と応じ、ミシェルは「チャオ、可愛い娘ちゃん！」と言って一旦別れる。

ニュー・ヨーク・ヘラルド・トリビューンのオフィス——階——昼

ピーターが「本当に綺麗だ。彼女に会わなくてはならない」と言う。二人の男が語り合っている。二人のうち一人は、ドゥードと認められる：他方は局長であるように見える。ドゥードは向きを変えそしてガラスの背後にパトリシアを見る。ドゥードが「えー！ほら彼女がここにいる！」と声を発する。パトリシアはドアを開け、微笑みながら入ってくる。ピーターが「本当に素晴らしい」と言うと、ドゥードが「彼女にあなたを紹介します」と応ずるので、ピーターは「やった！」と叫ぶ。パトリシアは坐っている秘書のところまで行き、秘書は彼女に手を差し出す。パトリシアが「こんばんわ、エレヌ」と挨拶をすると、エレヌが「こんにちはパトリシア。あなた遅刻よ。彼らはあなたを待っている」と言うのに、パトリシアは「ほー！大丈夫」と応じていると、ドゥードが「それで、パトリシア、仕事はどうなっ

ている？」と聞くので、パトリシアは「おー！悪くないわ。今から私の記事をタイプに打たなければならない」と答える。ドゥードはパトリシアを男に紹介する。ドゥードが「こちらが私たちの新しい偉大なりポーターです」と紹介すると、ピーターが「お会いできて光栄です。(パトリシアの手を握手しそしてお辞儀をして)はじめまして」と言い、パトリシアは「はじめまして」と応じる。ヴィタル警部とその部下が近づいて来る。坐っているエレヌに自己紹介しながら、ヴィタルはとてもそっと彼の警察手帳を取り出す。ヴィタルが「パトリシア・フランキーニさん」と言うと、エレヌは「彼女はあちらにいます...、と思います」と答える。彼は二人の男たちと話しているパトリシアの肩を叩く。ヴィタルが(彼の手帳をすばやくみせて)「フランキーニさん？」と尋ねると、パトリシアは「ええ」と答える。ドゥードは(パトリシアに)「また後で」と言って遠ざかる。ヴィタルが「フランス語を話しますか？」と聞くと、パトリシアは「ええ！」と応ずるので、ヴィタルは「この青年を識ってますか？」と言って、彼は彼女の目の前に《フランス・ソワール》紙の《一面》を振りかざす。そこには『モタール・チボーの殺人者は相変わらず逃亡』とある。彼女は新聞を取り、それを読むために視線を落とし、次いで頭を振る。パトリシアが「ノー」と答えると、ヴィタルは「気を付けて、お嬢さん...、パリ警察とふざけてはいけない」と警告する。パトリシアは「そうね...、これはミシェルだわ」と認める。ヴィタルが「ミシェル・ボワカール？」と確かめると、パトリシアは「ええ、彼だと分らなかった。この写真は古い」と言う。ヴィタルが「今朝、このビルの前で、あなたがミシェル・ボワカールと一緒にいるのが目撃された」と告げると、パトリシアは(彼女は歩道の男のことを気付いたように見える。)「誰が私を見たの？」と問う。ヴィタルが「彼はフォード・サンダーバード 3382 GF 75を運転していたね」と確かめると、パトリシアは「ええ」と答える。ヴィタルが「今彼はどこにいる？」と聞くと、パトリシアは「でも私は知らない」と白を切る。するとヴィタルが「気を付けて！...気を付けて、お嬢さん！」と脅すので、パトリシアは「いいえ、... 5、6回あっただけの男なの...私は...私は彼を親切だと思った...彼が何処に住んでいるか知らない...彼が何をしているのかも」と答える。ヴィタルが「あなたは彼をずっと以前から識っているのですか？」と尋ねるので、パトリシアは「いいえ... 3週間前ニースで出会った。私は休暇中だった。彼は私に彼にお金の借りのある男に会うためにパリに来ると言っていた」と説明する。ヴィタルが「誰？」と聞くので、パトリシアは「私は知らない。イタリア人の男」と言う。ヴィタル警部はポケットからノートとボールペンを取り出す。ヴィタルが「このミシェル・ボワカールに、再び会うと思いますか？」と聞くので、パトリシアは「多分。時々、彼は今朝のように、外出するため私に電話してくる。知らないわ！」と答える。ヴィ

タルがそのノートに記すので、パトリシアはオフィスの方へ向きを変え、ヴィタルが「ええ...、ええ...、ええ、ええ、...あなたは労働許可書を持っていますか？」と尋ねるので、パトリシアは「はい」と返事をする、ヴィタルは「あなたはあなたのパスポートに困ったことになりたくないだろ？」と脅しをかけてくる。パトリシアは「ええ、それは強く望まない」とやっとなで答える。ヴィタルは(彼は書いた紙を彼女に差し出す)「ええ...、それじゃもし彼と会ったら、これが私の番号だ」と言う。彼女はそれを取る。彼は出てゆく。彼女は紙を見つめる。パトリシアは「ダントン 01-00」と読む。ここにパトリシアが最後にミシェルを裏切る外的な一番の理由が見い出せる。つまりパリのジャーナリズムに仕事を得ることこそパトリシアの現実的な最大の希望であり、ミシェルを庇って警察に睨まれ、そのせいで労働許可書を失うことは彼女が最も恐れることだからである。それでは内的な理由は何だろう。それは映画の最後近くの場面で明らかになる。

通り——昼

ミシェルは新聞を読みながら歩く。突然、彼は新聞を持ちあげそして通りの向う側を見つめる：ビルの近くに二人の私服警部。彼らは隣のポーチの下に隠れている。パトリシアが小さなドアから出てきて、周りを見渡す視線を投げるそして歩道の上を歩く。

ヴィタルは助手にパトリシアを《尾行する》よう理解させる、他方彼の方は反対の方向へ出発する。ミシェルは場面を注意深く見守る。ミシェルの方へ、パトリシアは彼女がつけられていることを指で指し示す。ミシェルは理解したことを合図する。彼女は歩く。ミシェルは彼女を眼で追う。警部がパトリシアの後をつける。ミシェルは新聞の背後に隠れ、彼らの後を追う。

それは行進の時間である。パトリシアは、ちょうどら・マルセイエーズが響く時、映画館の入口の方へ走る。警部は映画館の方へ走る。

映画館——室内

パトリシアは急いでホールに通ずる階段を降りる：彼女は暗いホールの中に坐る。次いで彼女は立ち上がり化粧室の方へ赴く。

化粧室：《婦人》と《紳士》に通ずる開いた二つのドア。パトリシアはそこに入る...そして別のトイレのドアを開ける。彼女は入る。警部は《紳士》のドアから入る。彼は出てきて、《婦人》用の部分の中に入る、そしてすべてのドアを開ける。

映画館の中庭

パトリシアは一階の窓をまたぎそして右手の方へ走る。シャンゼリゼの行進を叙実する実況放送のレポーターの声が聞こえる。

隣の大通りで、パトリシアとミシェルは互いに身をすり寄せた。パトリシアが(身を振りほどきながら)「それであなたはイ

チカバチカと言ったのね」と言うと、ミシェルは「そう、少しそのせいだ」と返事をする。パトリシアが「ナポレオン座で西部劇を見ましょう」と提案すると、ミシェルは「そうだな、夜になるのを待つ方が良い」と応じる。警部が映画館から出てきて、立ち止まりそして右と左を見る。

ナポレオン座——室内

ミシェルとパトリシアは暗いホールに坐っている。彼らはキスしあう、一方で銃声と同様に西部劇の音楽が聞ける。

《用心しろ、ジェシカ、／キスをするをやめられなくなる／年月はあまりに速く過ぎる／避けよ、避けよ、避けよ／壊れた思い出を》と声流れる。これはルイ・アラゴンの詩集『断腸』の「エルザ、君を愛す」のルフランである。

スクリーンから来る、上映されている西部劇の主役たちの声を聞くことができる。

女の声が「あなたは思い違いをしている、シェリフ...私たちの物語は暴君の仮面のように悲劇的で高貴なもの。偶然のあるいは魔法のいかなる悲劇は存在しない。私たちの愛はどんな些細なことでも感傷におぼれることはない」と言う。最後の言葉は、アポリネールの詩集『アルコール』のなかの「狩の角笛」の最初の詩句である。これはミシェルとパトリシアの愛が一時の感傷によるものではなく、真実のそれであることを願うミシエルの想いを代弁している場面であるであろう。

通り——夜

グランド・ダルメの大通り：ナポレオン座の正面に《ウエスト・バウンド》の表題と同じく映画のヒロインの大きなポスター。恋人たちは映画館から出てくる。彼らは人々と交差する。一人の男が「おー！...綺麗な娘！...今日は、かわいい娘ちゃん！...」と声をかける。

シャンゼリゼ：一台の車がドラッグストア パピシスの近くの側道に止まる。パトリシアがそこから降りてくる...そしてドラッグストアの中に入る。光の新聞に次のように読める：《ミシェル・ポワカールの周りで網は狭められている》

ミシエルの傍に坐って、パトリシアは買ったばかりの新聞を読む。ミシェルが「奴らは何て言ってるんだ？」と尋ねると、パトリシアは「今読んでいる最中なの」と答える。ミシエルが「刑事たちが俺を探している。間抜けな奴らだ。俺は、フランスでは、彼らを結構好きな稀な男たちの一人だ...パトリシア、君を愛撫したいなあ...俺に話せよ、なあ！」と語りかけていると、パトリシアが「まあひどい！」と叫ぶ。ミシエルが「何が？」と問うと、パトリシアは「あなた結婚しているのね」と言う。ミシエルが「見せろ...そう、昔...、気の変な娘と...彼女は俺を捨てた...あるいは俺が彼女を捨てた...もう憶えていない」と説明する。パトリシ

アは「あなたのこと大好きよ...、すごく、ミシェル」と好意的な言葉を吐く。ミシェルが「パトリシア、盗んだ車に居るのはどんな気持ちだ？」と聞くと、パトリシアは「それであなた、何時警官を殺したの？」と聞き返す。ミシェルは「怖かった」と返事する。パトリシアが「でもどうして警察は私があなた識っていることを知ったのかしら？」と言うと、ミシェルは「ある男が俺たちが一緒に居るところを見て密告したにちがいない」と推測する。ゴダール自身が通報者を演じていた場面が思い起こされる。パトリシアが「それはとても良くない」と言うと、ミシェルが「何が？」と問うので、パトリシアは「密告すること、私はそれはとても良くないと思う」と自分の考えを述べる。ここでは最後の自分の密告など想像も及ばぬパトリシアの極めてミシェルに対する味方の立場を今は維持しているようにみえる。コンコルド広場のイルミネーションがはっきり分かる。しかしミシェルが「否、それはノーマルだ。密告者は密告する。泥棒は泥棒する。殺人者は殺人する。見てみろ、コンコルド(広場)が美しい」と言うので、パトリシアは「ええ...すべての光が神秘的だわ」と応じる。ミシェルが「俺はこの403に乗っているとばかなことをする。取り替ええなくちゃ」と考えを告げると、パトリシアは理解できず「何のこと？」と問う。ミシェルは「車を変えよう」と言う。

通り、夜:大層なガソリンスタンドの景。403は方向転換する。警備員が通路を開ける。403は車庫の上の階に上る。

駐車場の階:パトリシアとミシェルは403から降りる。

パトリシアが「キャディラックを盗むの？」と問うと、ミシェルは「あー...そうだ」と答える。彼らは急いで鞆を折り畳んだ堂々とした白いキャディラックの方へ進む。ミシェルが「キャディラック・エルドラド!...」と呟くと、パトリシアは「それで鍵は？」と聞く。ミシェルは(後部座席に飛び乗って)「君が運転しろ、俺は隠れる。この車庫では、いつも鍵を残している」と告げる。彼女はハンドルに就く。車は出口の斜面を下る。この場面もこれが自動車狂映画である面を表している。パトリシアが「下で、警備員に何て言うの？」と尋ねると、ミシェルは「今日は、と言うんだ。英語で彼に言え。そうすれば、彼はあえて何も言わないだろう。フランス人は臆病者なんだ」と知恵を授ける。また単語の解からぬパトリシアが「trouillardsって何のこと？」と問うと、ミシェルは「怖がることだ。君は怖いかい？」と聞き返すと、パトリシアは「今となっては怖がることはあまりに遅すぎる」と言う。車は警備の通路の前でブレーキをかける。パトリシアが(警備員に)「グット・ナイト!」と英語で挨拶すると、警備員は「こんばんわ、マダム」と返事する。通りが開く。車は走り抜ける。サンジェルマン大通り、夜:流れる光の新聞によってと同様、ネオンの看板によって照らされたビル。《パリ—ミシェル・ポワカール 逮捕は間近い》。ミシェルは「絶対に俺はアントニオを見つけなければならない。

ここで、うんざりさせられるのは誰かを探す時だ、見つからない。(突然、ミシェルは身を隠す)。彼は「うう!...そこに...」と呻く。褐色の髪の若い女性が車の方を見る。娘が(びっくり仰天して)「ミシェル!」と声を発する。ミシェルは身を再び起こしたところだ。パトリシアが「誰?」と聞くと、ミシェルは「アクセルを踏め、いとしい女!」と叫ぶ。また単語の解からないパトリシアは「minoucheって何と?」と問う。カビヨン交差点:カディラックはカフェ《ラ・ベルゴラ》の入口の前に並びに来る。パトリシアは降りる。

ラ・ベルゴラ——室内

ミシェルはパトリシアを従えて入る。一人の男のショット(支配人ギャビである)。ミシェルが「アントニオを見たか?」と尋ねると、ギャビは「かわいい娘ちゃんにキスするという条件でそれを君に教える」と応ずる。ミシェルは「それは俺次第ではない...彼女次第だ」と答える。パトリシアはギャビに微笑む。彼は身を傾け、頬のところでパトリシアの手にキスをする。ギャビは(身を起して)「奴はザンパールと一緒にモンパルナスへ行った」と教える。

モンパルナス大通り——夜

ミシェルが「カルル!」と叫ぶ。四人の男たちが議論している。彼らの一人が立ち上がり、車の方へ来る。カルルが「元氣か?」と聞くと、ミシェルは「同じだ!...アントニオは君と一緒にか?...ギャビが君たちがラ・ベルゴラに立ち寄ったと俺に言った」と聞き返す。カルルは(指で指し示して)「そうだ、彼はル・セレクトにいる...ほらあそこに彼がいる」と教える。パトリシアが「誰?」と聞くので、ミシェルは「誰って?...アントニオ?」と言うと、パトリシアが「いいえ...、あの人...」と問う。カルルが近づいて来る。ミシェルは紹介する。「パトリシア・フランキーニ——カルル・ザンパール」とミシェルが言う。カルルはパトリシアの手にキスする。カルルが(ミシェルに)「君の靴下を見せろ。君はツイードのジャケットと一緒に絹の靴下を履く」と言うと、ミシェルは「そう、俺は絹が好きなんだ」と答える。カルルは「分かったよ、でもツイードはダメだ」と服装に関する自分の趣味を述べる。その時ミシェルは(合図をおくって)「ベルッチ!」と叫ぶ。やっと探していた金を渡してくれる目当ての人物を見つけたのである。体の前にカメラをぶら下げ、一人の娘を連れだしたベルッチ。ベルッチが(ミシェルに会えたことを喜んで)「やあ、アミーゴ!」と言うと、ミシェルが「やあ、息子よ!」と応ずる。カルルが(そっと遠ざかって)「君たちだけにする」と言って立ち去ると、ベルッチは「また後で」と言い、ミシェルに「よろしい...君は俺に会いたいと思っていた。何度も電話したと聞いた」と言うと、ミシェルは「そうだ、俺は困っているんだ」と説明する。ベルッチが

「えっ!」と聞くと、ミシェルは「非常に! ...非常に!」と自分の窮状を訴える。ベルッチは「おお! ちえ...」と声を発する。ベルッチはミシェルが差し出した新聞を折り畳み、次いでそれを返す。ベルッチが「少し時間あるか?」と聞くと、ミシェルは「ああ」と答える。ベルッチが(娘に)「ほら、分かるだろ...、あの男だ」と指図すると、娘は「彼に何て言うの?」と尋ねる。ベルッチは(彼女を送り出して)「君の好きなこと...、何でもいい」と言い、(ミシェルに)「少し時間がかかる」と断わりの言葉を告げる。状況を理解できないパトリシアが「彼らは何してるの?」と尋ねると、ミシェルは「アントニオは彼女が男にキスする時写真を撮ろうとしている」と説明する。パトリシアが「何するために?」と聞くと、ミシェルは「確実に強請だ!」と答える。テラスに坐っている一人の客に接吻する娘。ベルッチは写真を撮る。ベルッチは「終わった!」と告げる。パトリシアは「戻って来るわ」と言ってどこかに行く。二人の男は彼女が立ち去るのを見詰める。ベルッチが「あの女は何だ?」と尋ねると、ミシェルは「惚れているだけにますます一層困っている」と心情を述べると、ベルッチが「彼女は何て美しいんだ!」と評する。ここにミシェルが警察の包囲網が狭まっているのに逃げようとしなないのは、アントニオから受け取るはずの金と同時にパトリシアへの愛が本物であって、彼女と離れたくないからであることがはっきり示されている。このパトリシアへの愛着がミシエルの破滅の道となる。パトリシアは友人のカップルと一緒に食事をしているドゥードの正面にテーブルに着いた。ドゥードが英語で「何故君は笑わないんだ、パトリシア? マクレガー氏と別れてきたばかりだ。彼は僕とモニックと一緒にアドリアンの家にいたんだ」と言うと、連れのモニックも英語で「勿論それは素敵だと言うことができるわ、でもそれは確かに私を驚かせるものでしょうね」と付け加える。パトリシアはミシエルの方向へ向きを変え、彼に投げキスをする。彼は唇の上を親指を通し、次いで煙草をふかす。ドゥードはギャルソンを呼んだ。ベルッチが「百万3千...、俺は出来るよ...恐らく明日! ...君の小切手はどの銀行の?」と尋ねるので、ミシェルは「B.N.C.I. (商工国立銀行)」と答える。ミシェルは小切手をポケットから取り出し、ベルッチにそれを差し出す、後者はチラッと一瞥する、一方でパトリシアは彼らと一緒に戻ってくる。ベルッチは「見せろ!」と命じる。パトリシアが(ミシェルに)「何してるの?」と聞くと、ミシェルは「分からない」と言う。ベルッチが「君に電話できるか、明日どこに?」と問うと、ミシェルは「分からない...ホテルはこの莫迦な観光客たちで一杯だ。どこに行くか分からない」と行き先のないことを告げる。パトリシアが「でもモンマルトルでなら! ...」と主張するが、ミシェルは(ベルッチに)「パトリシアは監視されている」と明かす。パトリシアが「私は友達がいる; 大きなアパートマンを持ってる」と言うと、ベルッチは「否、モンマルトルはダメだ」と指摘す

る。ミシェルも「否否、モンマルトルはダメだ、そう言ってるだろ」と念を押す。パトリシアが(驚いて)「どうして?」と聞くと、ベルッチは(微笑み)「モンマルトルにはあまりに敵が多いんだ、かわいい娘ちゃん... (ミシェルに)ダメだ、しかしザンバルのスウェーデン女の家に行け」と提案する。ミシェルが「彼女は相変わらずシャンパーニュブルミエール通りに住んでいるのか?」と尋ねると、ベルッチは「そうだ」と教えてくれる。ミシェルは「明日、彼女の家で電話してくれ」と頼む。彼らの各々が右手を前に上げ、もう一方の手でパチンと鳴らす。ミシェルが「さあ...、じゃアミーゴ!」と言い、ベルッチも「じゃ!」と応ずる。ミシェルとパトリシアは車に乗り込み、すぐに発車する。

スウェーデン女のスタジオ

褐色の髪の高背の娘がドアを開けに来る。ミシェルとパトリシアは入る。ミシェルが「アントニオからの紹介で来た。彼はここで夜を過ごせると俺に言った」と告げると、娘は「ええ、結構よ... (ドアを開けて) そこに坐って...ちょっと待って」と応ずる。スウェーデン女は恋人たちをリビングの方に残して、ポーズを取りに行く。カメラマンが「OK... 微笑んで... 微笑んで!」と叫ぶ。ミシェルが「君は写真を撮ることができるだろうに...、儲かる」と言うと、パトリシアが(かなり小さな声で)「おー! ...ダメ... 誰とでも寝なくてはならない」と反論するので、ミシェルは「あー!」と納得する。パトリシアが「私は或ることを考えている」と言うと、ミシェルが「何?」と聞き、パトリシアは「私は躊躇ってるの」と告げる。ミシェルが「何をやるんだい?」と尋ねると、パトリシアは「分からない...、それがなければ躊躇わないんだけど」と心中を告白する。ここにはパトリシアのミシェルと行動を共にすることへの躊躇があることを予見させている。ミシェルが「きみのジャーナリスト...、それじゃ、彼を捨てたんだろ?」と問うと、パトリシアは「ええ」と答える。ミシェルが「何故君は彼に挨拶をしたんだ?」と尋ねると、パトリシアは「もう彼に恋してないことを確信したかったの」と説明するので、ミシェルは「君は人生を複雑にする、君は」と忠告する。娘が「終わったわ! (カメラマンに) シャンゼリゼへ連れてって?」と言うと、カメラマンが「いいよ」と言い、娘が「さよなら」と言うと、パトリシアが「さよなら」と応じ、ミシェルも「さよなら」と告げる。彼らは出てゆく。パトリシアは、手にレコードを持ち、それを電蓄の上に置こうとする。ミシェルが「レコードは何をかけるんだ?」と問うと、パトリシアが「モーツァルトのクラリネット協奏曲。退屈?」と聞くので、ミシェルは「否...、それは結構好きだ」と答える。パトリシアが「あなたは音楽が好きじゃないと思ってた」と言うので、ミシェルは「このレコードだけ。俺の父親は

クラリネット奏者だった」と告げる。パトリシアは「あーそうなの？」と意外そうに言う。ガリマール版の、N.R.F.コレクションの、白いカバーのインサート、その上に次のように読める：『モーリス・サシュ アダブカダブラ』。ミシェルは「そうなんだ...俺の父はクラリネットの天才だった」と言う。ジャケットの周りの装丁の下に次のように読める：『我々は休暇中の死者である』レーニン』。モーツァルトのクラリネット協奏曲は、モーツァルト最晩年の傑作で、天上的な安らぎに満ちている。ここではミシェルとパトリシアの愛がそのような平穏にあることを願う二人の想いを伝えようとしているのであろう。パトリシアが「眠りましょうか？」と問うと「うん」とミシェルが応じる。パトリシアが「眠りは悲しい。《離れ (sépar)》なければならぬ」と言う、ミシェルがパトリシアのフランス語の単語を「...rer!」と直すので、パトリシアが(微笑んで)「離れる (se séparer) ! ...一緒に眠ると言う、でも本当じゃないわ」と言い直す。するとミシェルが「パトリシア！」と呼び、パトリシアは「どうしたの？」と尋ねる。彼女の方に視線を向けながら、彼は彼女に会釈して、電話の受話器を取る。ミシェルが「なんでもない。パトリシア！」と又呼ぶので、パトリシアが「何？」と答えると、「ここに来い！」とミシェルが命ずる。彼は上着のポケットを探る。彼は彼女に小銭を差し出す。「《フランス-ソワール》と牛乳一瓶を買ってきてくれ」とミシェルが頼むと、パトリシアは「オーケー」と返事をする。彼は電話番号を回す。点いているラジオがニュースを流す。「ソヴィエトの代表団は今朝まったく断固たる立場をとってセンセーションを巻き起こした。権利はない... (続きは聞き取れない)」とラジオから流れる。パトリシアは、ミシェルが振り向かないかどうか監視しながらバックの中の一枚の紙きれをとり、次いでベストをとる。この紙切れはヴィダール刑事の電話番号のそれであるだろう。ミシェルが「何時だ？」と聞くと、パトリシアは「5時よ」と答える。ミシェルは(激怒して受話器を置き)絶え間なく話し中だと吐く。パトリシアが「ミシェル？」と呼びかけると、ミシェルが(電話機を再び取り)「何だい？」と聞き返す。パトリシアは「何でもない」と言う。ミシェルが「《フランス-ソワール》! だ」と念を押すと、パトリシアは「私はあなたを見てるわ」と呟く。彼女は外に出る。

カンパーニュ プルミエル通り——昼

パトリシアは新聞を読みながら歩く。彼女は国营宝くじのチケット売り場の前を通る。売り子が《幸運の金曜日》の掲示番のある小屋の前を通る。売り子が「幸運の日だよ! ...あなたの運を試して...チケットを買って!」と声を掛ける。

カフェ——室内

パトリシアは《ビストロ》に入りそして腰掛に坐ろうとする。パトリシアが「スコッチを一つ」と注文すると、バーマンが「ありません」と答えるので、パトリシアは「それじゃコーヒーを」と言う。彼女は受話器をとり、躊躇いながら、番号を回す。パトリシアは「ダントン01-00... ヴィタル警部お願いします。もしもし...パトリシア・フランキーニです...分かるでしょ...あなたが探している青年は...私は彼に会ったばかりです...彼はプレミエール-カンパーニュ通り11に居ます...もしもし...もしもし...もしもし...」パトリシアは受話器を置き、新聞を取って外に出る。彼女は通りを走る。こうしてこの映画を観ている者にとってはいわば唐突な感じで、パトリシアは警察に密告して、ミシェルを裏切るのである。それは何故なのだろうか？パトリシアは「ジャーナリストとしての経歴を着実に歩むべきなのか、それとも、イタリアに行つて自由と幸福を得るという夢にすべてを賭けて、警察を敵にまわし、ミシエルのいる世界に、暴力とミシェルとパトリシアへの愛からなるギャング映画の世界へすすんで没入してゆくべきなのか」(注：コリン・マケイヴ/ローラ・マルヴィ「女のイメージ・性のイメージ」、ユリイカ第15巻第5号、ゴダール映画の未来、青土社、p.222) 迷っていたのである。しかし彼女は躊躇いながらもミシェルとの「自由と幸福を得るという夢」を捨て、確実でないジャーナリズムの経歴を歩む方を選らんだように見える。しかしそれは一方の外面的な理由であつて、パトリシアがミシェルを裏切る真の理由は、次の場面で明らかにされる。

スウェーデン女のスタジオ

パトリシアは新聞と牛乳瓶を置く。ミシェルは顔を上げ、すぐに新聞を取りそしてそれを開く。彼女は今や立ち上がり牛乳瓶の細長い口からラッパ飲みをするミシェルの方へ戻つて来る。彼は彼女に瓶を差し出す。ミシェルが「喉が渴いてるか？」と聞くと、パトリシアは「いいえ」と答える。ミシェルが「アントニオが15分後に立ち寄る。彼は電話したところだ。イタリアに行く、俺の可愛い娘!」と希望に満ちて言うと、パトリシアは「私は行かないわ」とつれなく拒否する。ミシェルが「いいや! ...俺は君を連れて行く! ...ベルッチがアマド・ゴオルディニ・エル・ソルシエルのエンジンのシムカ・スポーツを俺に貸してくれる! ...」と言うと、パトリシアは「ミシェル、私警察に電話したの...あなたがここにいると言った」と密告の衝撃の告白をする。仰天して、彼は彼女を少し乱暴に押す。ミシェルが「君はちょっと頭がおかしい! ...頭がおかしい...違うか？」と非難すると、パトリシアは「いいえ、とても大丈夫よ、いいえ...、おかしい。私はあなたと一緒にもう行きたくないの」と彼女の本音を述べる。それを聞いて

たミシェルは「俺はそれを知っていた」と認める。パトリシアが「私わからないの」と言うと、ミシェルは「俺たちが話していた時、俺は俺のことを話し...君は君のことを話していた」と互いに理解し合わず、利己的な言葉を交わしていたことを認める。パトリシアが「私は莫迦だと思おう」と言うと、ミシェルは「君は俺のことを話すべきだったのに対して...そして君は俺のことを話すべきだったのに」と言う。パトリシアは「私はあなたを愛したくない。そのために警察に電話した。私がある人と一緒にいたのは、私は私がある人を愛しているかあるいはあなたを愛していないか確信しなかったからなの...そして私はあなたに意地悪だから、私がある人を愛していない証拠だわ」と自分の本心を認める。すなわちパトリシアはミシェルが自分から離れざるを得ないようにするために警察に密告したのである。ミシェルが彼女の密告を聞いて慌てて逃げだし、自分から離れてしまうことを望んだのである。しかしその結末はパトリシアが予想していたのとは違う最悪の事態を引き起こしてしまうことになるだろう。電蓄がモーツァルトのレコードを演奏している。彼は乱暴に機械を消す。ミシェルが激怒して「もう一度言ってみろ！」と言うと、パトリシアは「そして私はあなたに意地悪だから...、私がある人を愛していない証拠だわ」と繰り返す。するとミシェルは「幸せな愛はないと言われる、しかしこれは反対のことだ」と呟く。ここにもジョルジュ・ブラッサンスのシャンソンの題が出る。何故パトリシアにも「幸せな愛がない」かと言えば、表面的には彼女はミシェルと一緒にいると彼女が夢見るパリのジャーナリストとしてキャリアを積みなくなることを怖れて密告したようにみえる。しかし内実は、ミシェルの愛を受け入れたにもかかわらず、自分の性的魅力に自覚的で、言い寄る男に容易に体を許してしまう気配の多いパトリシアという女は一人の男に愛の心情を守る忠誠心と能力がなく、やくざなミシェルへの愛を信じるだけの勇氣に欠けていたのである。即ち愛の信の欠如である。それ故パトリシアにも「幸せな愛はない」のである。パトリシアが「もし私がある人を愛していたら...」と言いかけると、ミシェルは(同時に)「俺は既にそう思っていたんだ」とパトリシアが自分を心から愛していないことを薄々知っていたことを念押しする。パトリシアが「おー！...あまりに複雑だわ」と理解できないことを嘆くと、ミシェルは「反対だ、不幸せな愛はない」と言う。「不幸せな愛はない」とはミシェルにとって、「幸せな愛」どころか「不幸せな愛」さえないということである。パトリシアがミシェルの言葉を解らないまま、「私は男の人たちにあたしのことに関わって欲しくないの」と男への不信を述べると、ミシェルは「俺は、独立を信じない、しかし独立している」と自分の存在と感情の自立性を主張する。パトリシアが「多分あなたは私を愛してるの？」と問うと、ミシェルは「君は独立を信じているが、独立

してない」とパトリシアの気持ちの自立性の無さを非難する。パトリシアが「それで私はあなたを密告したの」と認めると、ミシェルは「俺は君より強い」となお自己の非害性を信じていることを示す。パトリシアが「今、あなたは逃げざるをえない」と警告するが、ミシェルは「君はちょっと頭がおかしい...理屈のように嘆かわしい」と逃亡することを拒否する。パトリシアが「あなた莫迦よ！」と言うと、ミシェルは「誰とでも寝るといふ口実の下に、誰とでも寝て...愛する一人の男と寝たがらない女の娘のようだ」とパトリシアという女の本質への厳しい指摘をする。パトリシアが「何故逃げないの？私は沢山の男の子と寝たわ。私を当てにすべきでない。...でも逃げて、ミシェル、何を待っているの？」と聞くので、ミシェルは「否、俺は留まる；気分が悪い...いずれにせよ、俺は監獄に行きたい」と答える。パトリシアが「あなたおかしい」と批判すると、ミシェルは「そうだ。誰も俺に話しかけないだろう。壁を見つめるだろう」と逃亡に疲れて警察に捕まることを覚悟しているようなことを告げる。この期に及んでも、ミシェルは自分が死に到ることは予想していないのである。しかし結末は残酷な形で終わる。パトリシアが「分かるでしょ、あなた言っていたわ...」と言いかけると、ミシェルは(すげなく彼女を避けて)おー！...ちえ。ベルッチだ！とベルッチが金を持ってきた状況に気付く。この言葉に、彼らは突然振り返りそしてドアの方へ突進する。

カンパーニュ・プルミエール通り——昼

そして物語の悲劇的な結末に至る。ミシェルは外に出る。颯を折り畳んだ車(シムカ・スポーツ)が彼の前を通りすぎる。ミシェルが「ベルッチ！」と叫ぶと、ベルッチは(停まらず)やあアミーゴ、待て...、待て...駐車する」と応じる。ミシェルが突進すると、すばやくベルッチが折りカバンを彼に差し出す。ミシェルが(息を切らして)「ずらかれ、ポリ公が5分後にやって来る」と告げると、ベルッチは「だがお前にお前の金を持ってきた」と知らせる。彼はスーツケースを与え、ミシェルに言ったばかりに事を実現する。ミシェルが(とてもイラついて)「ずらかれ、アメリカ娘が俺を密告した」と教えると、ベルッチは(彼の腕を取って)「あー！...くそー...さあ、さあ来い！」と車に乗るよう誘う。しかしミシェルは「否、俺は残る。お前は逃げろ」と言う。ベルッチが「莫迦な真似をするな。(ドアを開け)車に乗れ」と更に言うが、ミシェルは「否、俺は残る...そう、俺はうんざりだ...、疲れた...、眠りたい」と答える。ベルッチが「お前はどうかしている！...さあ乗れ」と執拗に誘うが、ミシェルは「否、警察なんか問題にしない...命だけはどうかなる(彼は通りの奥の方を見る)今、困っていることは、彼女のことを考えるべきでないということだ、しかしそれが出来ない」とこの期に及んでもパトリシア

への愛着から逃れられない心情を明らかにする。ベルッチが「俺の自動拳銃が要るか？」と言う。ベルッチはグローヴコンパートメントからコルトを取り出し、それをミシェルに差し出す。ミシェルが（武器を拒否して）「いらん」と言うと、ベルッチは（執拗に）「莫迦なまねをするなど俺はお前に言う」と主張し続けるが、ミシェルは（武器を後部座席に投げて）「ずらかれ」と叫ぶ。黒の403が近づく。ベルッチは彼の武器をシートに回収する。403のドアが開き二人の警部が姿を見せる、その中にヴィタルがいる。後者はリヴォルバーを手にし、もう一人は軽機関銃を持っている。ベルッチが彼の拳銃を前に投げる。ミシェルがそれを拾う。ベルッチは発信し逃げる。ここでミシェルが拳銃を手を取ったことが致命傷になる。ヴィタル警部と部下は、腕を伸ばし、引き金を引く。画面では銃を発射するのはヴィタル警部だけである。それはミシエルの背中に命中する。ミシェルはやっとのことで走る。パトリシアが走る。通りの端にたどり着くと... ミシェルは息を切らして、舗道の上に頭を前にして静止する。ミシェルは、仰向けに横になり、眼にサングラスをかけそしてやっとのことで煙草の最後のひと吹きを吸う。パトリシアは左手で顔を部分的に隠す；ゆっくりと手を引っ込める。ミシェルは彼女を見つめ、次いで、やっとのことでとても大きく口を開く... そして一続きの擧め面をする。ミシェルは「君は本当に最低だ！」と最後の言葉を吐く。ミシェルは右手を顔の眼まですべらし、自分自身で眼を閉じる。彼の顔が、ぐったりして、横に傾く。ミシェルは死んでしまったのである。パトリシアが「彼は何と言ったの？」と尋ねると、ヴィタル警部は「彼は言った：君は本当に最低だ」と言い直す。パトリシアは声の方に向きを変え、男を見つめ次いでとてもゆっくりと向きを変えそして、親指で唇を擦りながら、言う。「dégueulasse って何のこと？」。パトリシアはこの単語を知らなかったのである。彼女は顔をそらす。黒いスクリーン次いで「終り」の単語。

この映画の鍵語であるdégueulasseという言葉について、前田英樹は、「おそらく、ここではdégueulasseの意味には少なくとも三つの段階がある。まずパトリシアの密告は「最低」であり、つぎに彼女がミシェルとの滑稽なディアログに持ち込む〈意味〉は「最低」であり、最後にこの映画の即時的なイマージュと滑稽なディアログとの結合は「最低」である。第一段階は筋書きのなかにあり、第二段階はこの映画が形成する台詞の抽象的な線のなかにあり、第三段階はやはりこの映画が形成するイマージュ、言葉、音響の純粋なアレンジメントのなかにある。パトリシアは観客に向かって「最低って何？」と言う。パトリシアという登場人物がそれを言うことは、第二段階にかかわっている、つまり、彼女は自分がこの映画に持ち込む〈意味〉が「最低」であることを知らない。しかし、彼女がその台詞をつぶやく相手が観客であることは、そのつぶやきが、『勝手にしやがれ』という結合体の全体にかかわっていることを示しているだろう。〔改行〕『勝手にしやがれ』が作り出す即時的な

イマージュと滑稽なディアログとの結合は、なぜdégueulasseなのか。この馬鹿げた頓狂な犯罪映画は、フィルム・ノワールの観客にとってまずそうなのであり、意味ありげな芸術を期待する観客にとってもまちがいになくそうである。しかし、映画はそのようではなくてはならない、ミシェルが「阿保」になる必要がどうしてもあるように。ゴダールはそう言いたいのだろう」（注：『現代思想臨時増刊号 総特集 ゴダールの神話』、p.322-323）と説明する。

ベルモントはこの最後の場面でゴダールから走れるだけ走ってくれと言われたそうだが、この衝撃的な結末について松浦寿輝は次のように述べている。「ミシェル・ポワカールは走る、走る、走る、死の瞬間を少しでも先に延ばそうとして。ついに倒れても、まだ彼はパトリシアにシニカルな求愛の信号を送りつづけ、なおも死を先送りしつづける。『勝手にしやがれ』のラストは、瀕死であることという映画の特権的事態をみずみずしくも途方もない運動として提示してみせた驚くべき画面連鎖から成り立っている。『散りゆく花』のリリアン・ギシュに倣って彼が死の間際に自分の手で微笑みを作るのは、決定的な不動の瞬間をなおいくらかなりと延期しようとするせっぱつまった、文字通りの必死の儀式の反復にほかならない。ベルモントの死を引き継いで次の瞬間セバグの正面像が大写しになるとき、彼女は何を見つめているのか。「私」たち観客の瞳をか。そうではないだろう。彼女は求愛の信号を返しているのだ。死んだベルモントに向かって。つまりは絶対的に空虚に向かって。映画の不可能性に向かって、やがて訪れるべき映画の死に向かって」（注：松浦寿輝『映画n-1』、p.199）。

おわりに

最後に、この映画の主題であるジョルジュ・ブラッサンスのシャンソン「幸せな愛はない」は、ブラッサンスの作品の中で最高傑作であるばかりでなく、私見ではあらゆるシャンソンの中で最も感動的な秀作に位置すると考えているが、ブラッサンスは歌詞を最後の節を省略して歌っているので、ルイ・アラゴン (Louis ARAGON) の全詩（注：ARAGON, *Œuvres poétiques complètes* I, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2007, P.1004）を掲げておこう。

II N'Y A PAS D'AMOUR HEUREUX

Rien n'est jamais acquis à l'homme Ni sa force
Ni sa faiblesse ni son cœur Et quand il croit
Ouvrir ses bras son ombre est celle d'une croix
Et quand il croit serrer son bonheur il le broit
Sa vie est un étrange et douloureux divorce

Il n'y a pas d'amour heureux

Sa vie Elle ressemble à ce soldats sans armes
Qu'on avait habillés pour un autre destin
À quoi peut leur servir de se lever matin
Eux qu'on retrace au soir désœuvrés incertains
Dites ces mots Ma vie Et retenez vos larmes

Il n'y a pas d'amour heureux

Mon bel amour mon cher amour ma déchirure
Je te porte dans moi comme un oiseau blessé
Et ceux-là sans svoir nous regardent passer
Répétant aprs moi les mots que j'ai tressés
Et qui pour tes grands yeux tout aussitôt moururent

Il n'y a pas d'amour heureux

Le temps d'apprendre à vivre il est déjà trop tard
Que pleurent dans la nuit nos cœurs à l'unisson
Ce qu'il faut de malheur pour la moindre chanson
Ce qu'il faut de regrets pour payer un frisson
Ce qu'il faut de sanglots pour un air de guitare

Il n'y a pas d'amour heureux

Il n'y a pas d'amour qui ne soit à douleur
Il n'y a pas d'amour dont on ne soit meurtri
Il n'y a pas d'amour dont on ne soit flétri
Et pas plus que de toi l'amour de la patrie
Il n'y a pas d'amour qui ne vive de pleurs

Il n'y a pas d'amour heureux

Mais c'est notre amour à tous deux

幸せな愛はない

人間に得られものは何ひとつない
その力、その弱さ、その心さえも
腕を開いても、その影は十字架のそれであり
幸福を抱きしめるつもりで、それを砕いている
人の生は奇妙な苦しい別離なのだ

幸せな愛はない

人の生、それは武器を持たぬ兵士に似ている
もう一つ別の運命に装いをした兵士たち
朝起きることが彼らに何の役に立つだろう
夕べに再びなすこともなく定めなき身にかえる彼ら
こう言いたまえ「私の生」と、そして涙を抑えるのだ

幸せな愛はない

私の美しい愛、私のいとしい愛、私の裂けた傷
怪我した小鳥のように私はお前を胸の中に抱いてい

る
そして連中は何も知らずに通り過ぎる私たちを眺め
私の編んだ言葉を私の後から繰り返している
お前の大きな瞳のためにたちまち死んだあの言葉
幸せな愛はない

生きる術を学ぶ時、それはもう遅い
夜の闇にわれらの心をひとつ声に合わせて泣くがよい
ほんの小さな歌のためにもどれほどの不幸が要ることか
旋律の代価を支払うのにどれほどの悔恨が要ることか
ギターの調べのためにどれほどの啜り泣き要ることか

幸せな愛はない

苦痛を伴わない愛はない
人を傷つけぬ愛はない
人を挫かぬ愛はない
そして祖国の愛、お前も同じこと
涙で生きぬ愛はない

幸せな愛はない

だがこれが私たち二人の愛なのだ

使用ビデオ及びテキスト

VHS 『勝手にしやがれ』、バック・イン・ビデオ
DVD 『勝手にしやがれ』、ギャガ・コミュニケーションズ
窪川英水編注 『勝手にしやがれ』、白水社、1991

参考文献

『ゴダール 全評論・全発言Ⅰ』、筑摩書房、1998
『ゴダール 全評論・全発言Ⅱ』、筑摩書房、1998
『ゴダール 全評論・全発言Ⅲ』、筑摩書房、2004
コリン・マッケイヴ 『ゴダール伝』、みすず書房、2007
アラン・ベルガラ 『60年代のゴダール：神話と現実』、筑摩書房、2012
蓮見重彦 『ハリウッド映画史講義：驕りの歴史の中で』、筑摩書房、1993
松浦寿輝 『映画 n-1』 筑摩書房、1987
『ユリイカ 第十五巻第五号 特集 ゴダール 映画の未来』、青土社
『ユリイカ 第21巻第16号 総特集 スーヴェル・ヴァーグ30年』、青土社
『現代思想臨時増刊号 第二三巻第十号 総特集 ゴダールの神話』 青土社